

はじめに

近年、世界では水中遺跡の発見が相次いでいます。水中遺跡とは、もともと陸地であった場所が水没して形成された遺跡や沈没船などを指します。日本では十三世紀の蒙古襲来の際に沈んだ船が長崎県松浦市鷹島沖で発見され、注目を集めています。水中遺跡は出土品の保存状態が良好な場合が多く、特定の瞬間をそのまま残したタイムカプセルともいえるべきものです。特に、沈没船の積荷は海を渡って行われた交易の様相を知ることができる貴重な資料です。

文化庁では、平成二十五年に水中遺跡調査検討委員会を設け、水中遺跡の保存と活用についてさまざまな検討を行ってまいりました。当館は文化庁の委託を受け、諸外国における水中遺跡の保存と活用の取り組みの調査や、水中遺跡を発見するための探査技術の向上を目的とした調査などを行っています。

このたび、文化交流展特別展示「水の中からよみがえる歴史―水中考古学最前線―」を開催いたします。旧石器時代から明治時代にまでおよぶ各時代の水中遺跡とその出土品を通して、わが国の水中考古学の発展の軌跡をふりかえり、今後の研究の可能性、当館の取り組みなどをご紹介します。水の中に眠っていた小さな宝から、よみがえる歴史を感じていただければ幸いです。

本展の開催にあたり、貴重な資料をご提供いただきました所蔵者ならびにご協力をいただいた方々に厚く御礼申し上げます。

平成二十九年七月

九州国立博物館



目次

ごあいさつ	1
水中考古学への入口	3
主な水中遺跡	6
プロローグ 海からよみがえる蒙古襲来	8
第1章 水中に遺跡あり―水中考古学のあけぼの―	14
第2章 海底発掘調査のはじまり―水中での学術調査の歴史―	17
第3章 最新の水中考古学調査―これからの水中考古学―	22

主要参考文献	30	／	出品目録	32	／	List of Works	38	／	Foreword	39
--------	----	---	------	----	---	---------------	----	---	----------	----

凡例

- ・本書は、九州国立博物館文化交流展示室において平成二十九年(二〇一七年)七月十五日(土)から九月十日(日)まで開催する特別展示「水の中からよみがえる歴史―水中考古学最前線―」の解説付図録である。
- ・作品番号は展示の順序とは必ずしも一致しておらず、本書にはすべての出品作品を掲載してはいない。
- ・本書は、佐々木蘭貞(九州国立博物館)が執筆した。
- ・出品作品の写真は、佐々木、落合晴彦(九州国立博物館)が撮影したほか、各所蔵者、関係者から提供を受けた。そのほかの写真も含めて、写真の提供元については巻末に記した。
- ・英語翻訳はまい子・ベアが担当し、臺信祐爾(九州国立博物館)、佐々木が監修した。
- ・本書の編集は、佐々木、今井涼子、小川香菜恵(ともに九州国立博物館)が担当し、光吉美恵子、勝野朋子(ともに九州国立博物館)がこれを補佐した。
- ・本展覧会は、船の科学館「海の学びミュージアムサポート」の協力を得て開催した。

水中考古学への入口

水中考古学の芽生え

エーゲ海のとある小さな漁村で、ギリシャ時代の遺物が漁師の網にかかって引き揚げられることが知られ、歴史学者の興味を集めました。そこは、紀元前四八〇年、ギリシャ艦隊とペルシア艦隊の間でくり広げられた「サラミスの海戦」の跡地であったからです。早速、ギリシャ政府が中心となり潜水調査が行われました。この調査の目的

は、遺物の出土地点の記録を取り、それらを引き揚げ研究することにあります。したが、同時に、遺物を展示することにより、一般市民の歴史理解を深めることにもありました。しかし、この調査の報告書には、水中で記録を取ることが想定以上に困難であり、また、引き揚げた後に遺物の劣化が進行したため、調査は失敗であったと書かれています。そして、今後行われるであろう水中での考古学調査は、これらの問題を克服することが課題であると結ばれ

ています。この報告書が一八八四年に書かれたことを考えると、当然の結果といえます。

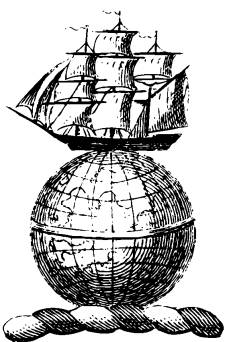
十九世紀における潜水は常に危険と隣り合わせの作業でした。そのため、多くの人にとって水中は未知の世界でした。一九五〇年代、フランスのジャック・クイヴ・クストーらにより開発された自給式水中呼吸装置（スキューバ）が一般にも普及し始め、人類は初めて自由に海の中を泳ぐことが可能になりました。そのとき、水中にも多くの人類の痕跡が残されていることを初めて見るようになりました。

一九六〇年〜八〇年代には、考古学者自らが水中に潜り、陸上の発掘調査とほぼ同じスタンスで水中でも発掘ができるまで潜水技術が発達しました。スウェーデンの軍艦ヴァーサ号（一六二八年沈没）、イギリス・ヘンリー八世の旗艦メアリー・ローズ号（一五四五年沈没）、韓国の新安沈没船（二二三三年頃沈没）など世界各地で水中遺跡の発掘が行われ、歴史の研究に大きな成果をもたらしました。アメリカの研究者ジョージ・バスは、トルコで発掘したウル・ブルン沈没船（紀元前一三〇〇年頃）などの調査が評価され、アメリカ国家科学賞を授与されるなど、水中考古学の研究は一般市民にも広く理解される分野となったのです。

二十一世紀の水中考古学は、いかに水中遺跡を保存し活用するかに焦点が当てられています。ユネスコの水中文



図1 ヴァーサ号博物館では17世紀の軍艦そのものを見ることができる





化遺産保護条約では、遺跡を発掘せず
に現地で保存する方法が第一の選択肢
として唱えられています。アジアに目
を向けると、韓国や中国は水中遺跡の
調査を行う国立の専門機関が作られ、
自国に存在する水中遺跡の調査を国家
規模で行っています。フィリピン、タ
イ、ベトナムなど東南アジアの国々で
も水中遺跡の調査は着々と進められて
大きな成果を挙げています。

最新の水中考古学

水中考古学が世界で認められるまで
には、多くの努力の積み重ねがありま
した。それはまず、水中遺跡をどのよ
うに見つけるかにはじまり、水中
で安全に効率よく作業を行うための技
術開発に至るまでさまざまです。

また、出土品の保存処理の技術も水
中考古学には欠かせない要素の一つで
す。長い間水中にあり、空気が遮断さ
れた環境にあった遺物は、急に空気に
触れて乾燥すると、大きく変形したり
崩れ去ってしまうこともあります。こ
れを防ぐために出土品に特殊な薬品を
含浸させるなど空気中でも保管できる
ようにすることを、保存処理といいま
す。船体の九五%以上が残っていた
ヴァーサ号(図1)の保存処理は、スプ
リンクラーを船内に巡らせて、溶剤を
噴射する方法を採用しましたが、処理
が終わるまで二十年もかかっています。

水中考古学は、科学技術の進歩と共
に発展してきました。人間に代わって
水中の様子を映し出す探査技術や水中
で作業を行う水中ロボット(図2)な
どが水中遺跡の調査に利用され、人間
が潜れない場所でも水中遺跡の探査や
調査を行えるようになりました。また、
水中での記録方法も、デジタル技術の
応用により、より短期間で正確な三次
元情報を記録することが可能となって
います。また、保存処理の技術も常に



図2 フランスの国立研究所を中心に開発中の水中考古学専用人型ロボット

進化を続けており、出土品本来の性質
を失うことなく、しかも短期間で処理
が終わる方法が開発されています。

日本の水中考古学の芽生え

二十世紀初頭、長野県諏訪湖に一艘
の小舟がありました。この舟に乗った
人物は、なにやら鋤簾で湖底をさらっ
ては、丹念に土を調べているようでした。
この人物こそ東京帝国大学(現
東京大学)で人類学を創始した坪井正
五郎でした(図3)。坪井は、諏訪湖か
ら石鏃せきざくと思われる奇妙な石が見つかる
ことを聞きつけ、湖底の調査を実施し
ました。坪井が『東京人類学会雑誌』
に諏訪湖から発見された石鏃について
数編の論文を発表したことをきっかけ

に、水中に存在する遺跡への学術的な
関心が高まりました。

坪井が湖底に存在する遺跡を世に広
める以前から、人々は水中から引き揚
げられる品々に対して興味を持って
いたと推測できます。十八世紀に『雲
根志』を記した木内石亭は、琵琶湖で
発見された奇妙な石鏃などについて記
述を残しています。また、蜷川式胤も
『瓦器類』において、瀬戸内海で発見
された須恵器について報告していま
す。しかし、なぜ水中に人類の痕跡が
存在したのかを考え、仮説を立ててそ
れを実証しようとした人物は、坪井が
最初でした。日本の水中遺跡の研究は、
この時始まったと言えるでしょう。

日本の水中遺跡の調査は、世界に先
駆けて行われました。しかし、世界各
地で水中遺跡の発掘が相次ぎ、水中考

章の紹介

プロローグ

海からよみがえる蒙古襲来

長崎県松浦市の鷹島海底遺跡は、蒙古襲来の沈没船が発見された遺跡として知られています。武器・武具類だけでなく、船上での生活に必要な道具、そして、人々のさまざまな「思い」を伝えるモノが発見されています。これらの資料から、世界史に名を残す悲劇の海戦に参加した人々の声を聴くことができます。

第1章

水中に遺跡あり —水中考古学のあけぼの—

20世紀初頭、長野県諏訪湖の湖底から引き揚げられた石鏃をきっかけに、日本における水中遺跡の研究が始まりました。また、瀬戸内海や琵琶湖など、日本各地から過去の人類の痕跡が発見され、人々の関心を集めました。水中考古学研究の先駆けとなった遺跡を紹介します。

第2章

水中発掘調査のはじまり —水中での学術調査の歴史—

戦後の混乱が過ぎ、文化財を守る体制が整い始めたころ、陸上の遺跡と同様に水中遺跡も発掘調査が行われるようになりました。徳川幕府の軍艦開陽丸の調査は、日本で初めて実施された大規模発掘調査でした。その経験が、各地の水中遺跡の調査に受け継がれ、水中考古学の基礎が築かれました。

第3章

最新の水中考古学調査 —これからの水中考古学—

近年の科学技術の進歩は、水中考古学に大きな変化をもたらしています。水中の様子を調べる探査技術や水中で正確な位置を記録する方法、また、出土品の保存処理や遺跡の活用方法などさまざまな面で急速な発展を見せています。最終章では、最新の水中考古学調査について、また、九州国立博物館が実施した調査を紹介します。



図3 坪井正五郎が行った諏訪湖曾根遺跡の調査の様子

古学という学問が育ちつつある中、日本では、考古学者が水中に潜って調査を行うことはほとんどなく、網走湖や

富士五湖などで簡易な調査が実施された例が数件あるのみでした。そのようななか、一九七四年から実施された徳川幕府の軍艦開陽丸

の調査は、日本初の地方自治体を主体とした大規模水中遺跡調査といわれています。その後、ダイビングスポットとして知られていた「水の子岩」（香川県小豆郡小豆島町）の調査や坂本龍馬の「いろは丸」の調査など日本各地で水中遺跡の調査が実施されるようになり、学術調査だけでなく陸上と同じように護岸工事などの開発に伴って調査が行われることもありま

す。特に、琵琶湖の総合開発事業に関連した文化財の調査が知られています。粟津湖底遺跡（滋賀県大津市）では、縄文時代の貝塚が有機物を多く含んだ状態で発見され、縄文人の豊かな食生活を示す貴重な資料となっています。

数ある日本の水中遺跡の中で、長崎県松浦市の鷹島海底遺跡は、おそらく最もよく知られた水中遺跡です。この遺跡から、十三世紀の蒙古襲来（一二八一年 弘安の役）の際に沈んだ元軍の船が発見されています。実は、この遺跡の存在は古くから知られており、最初の調査が行われてから三十年以上も経過しています。まさに、日本水中考古学の象徴的な存在であるといえます。二〇一二年には、遺跡の一部が国指定史跡鷹島神崎遺跡となり、沈没船の遺跡としては、日本で初めて国の史跡に指定されました。これを契機に文化庁では水中遺跡の保存と活用を検討するために「水中遺跡調査検討委員会」を設け、日本にふさわしい水中遺跡の調査と整備の体制を整える動きが始まったのです。

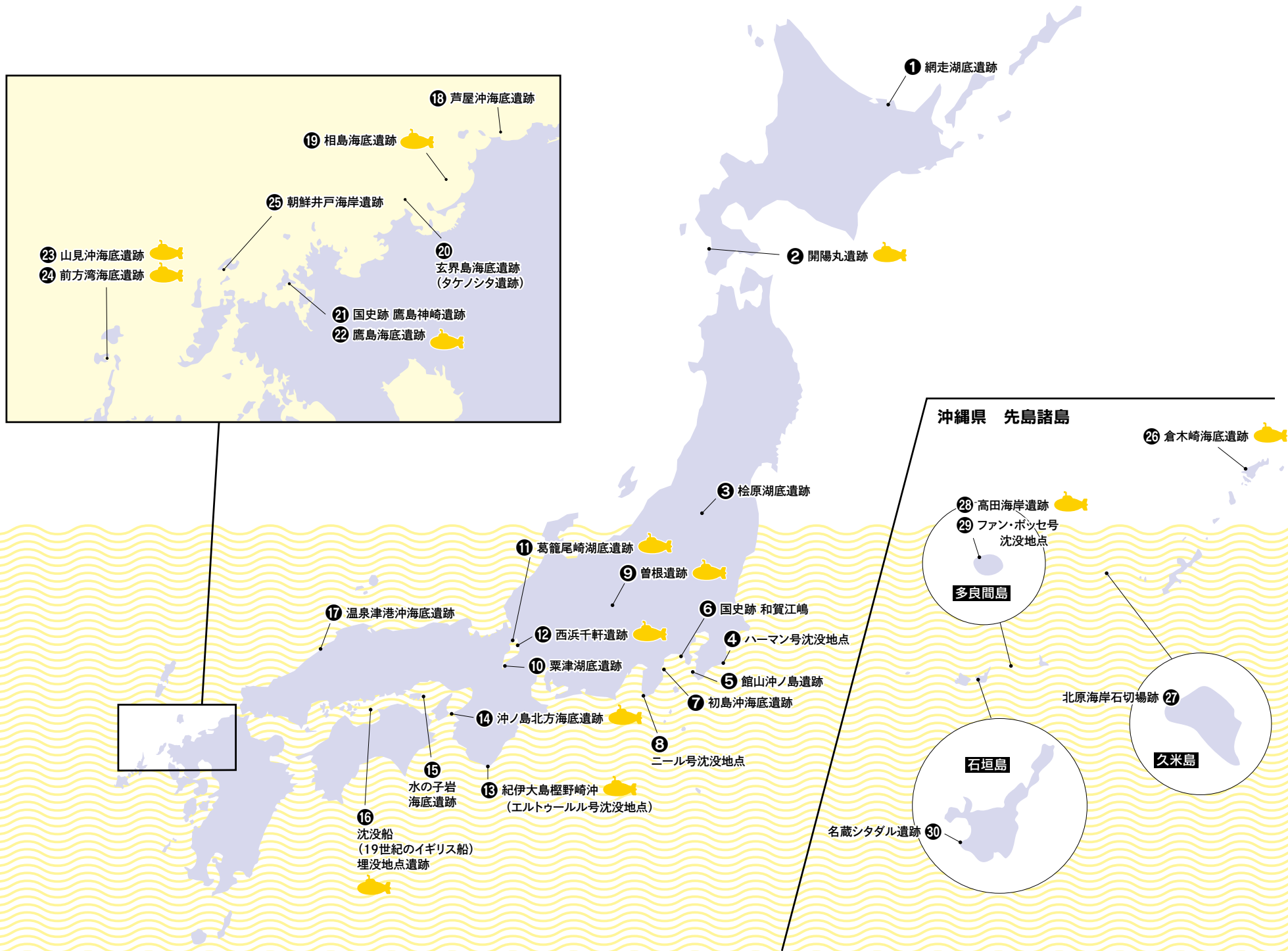
主な水中遺跡

* は今回出品する遺跡

番号	遺跡名	遺跡の種類	所在地	時代/世紀・年代
1	網走湖底遺跡	散布地	北海道網走市	縄文/七千年前
2	開陽丸遺跡	沈没船	北海道檜山郡江差町	江戸/十九世紀
3	桧原湖底遺跡	集落跡	福島県耶麻郡北塩原村	江戸/明治/十七~十九世紀
4	ハーマン号沈没地点	沈没船	千葉県勝浦市	江戸/明治/十九世紀
5	館山沖ノ島遺跡	散布地	千葉県館山市	縄文/一万年前
6	国史跡 和賀江嶋	築港	神奈川県鎌倉市・逗子市	鎌倉/十三世紀
7	初島沖海底遺跡	沈没船	静岡県熱海市	江戸/十七~十八世紀
8	ニール号沈没地点	沈没船	静岡県賀茂郡南伊豆町	江戸/明治/十九世紀
9	曽根遺跡	散布地	長野県諏訪市	旧石器/縄文/ 二万九千年前~一万年前
10	粟津湖底遺跡	貝塚	滋賀県大津市	縄文/一万年前~四千年前
11	葛籠尾崎湖底遺跡	散布地	滋賀県長浜市	縄文/平安/ 八千年前~十二世紀
12	西浜千軒遺跡	集落跡	滋賀県長浜市	室町/十五世紀
13	紀伊大島樫野崎沖 (エルトゥール号沈没地点)	沈没船	和歌山県東牟婁郡串本町	明治/二十世紀
14	沖ノ島北方海底遺跡	散布地 (沈没船)	和歌山県和歌山市	室町/十五世紀 江戸/十八世紀
15	水の子岩海底遺跡	散布地	香川県小豆郡小豆島町	室町/十四世紀
16	沈没船 (十九世紀のイギリス船) 埋没地点遺跡	沈没船	広島県福山市	江戸/十九世紀
17	温泉津港沖海底遺跡	散布地	島根県大田市	江戸/十八~十九世紀
18	芦屋沖海底遺跡	散布地 (沈没船)	福岡県遠賀郡芦屋町	江戸/十九世紀
19	相島海底遺跡	散布地	福岡県糟屋郡新宮町	平安/九世紀
20	玄界島海底遺跡 (タケノシタ遺跡)	散布地	福岡市西区玄界島	江戸/十七世紀
21	国史跡 鷹島神崎遺跡	沈没船	長崎県松浦市	鎌倉/十三世紀
22	鷹島海底遺跡	散布地 (沈没船)	長崎県松浦市	鎌倉/十三世紀
23	山見沖海底遺跡	散布地	長崎県北松浦郡小値賀町	室町/安土桃山/ 十六~十七世紀
24	前方湾海底遺跡	散布地	長崎県北松浦郡小値賀町	平安/室町/十一~十四世紀
25	朝鮮井戸海岸遺跡	散布地	長崎県平戸市	旧石器・中世/近世
26	倉木崎海底遺跡	散布地	鹿児島県大島郡宇検村	平安/鎌倉/十二世紀
27	北原海岸石切場跡	石切場跡	沖縄県島尻郡久米島町	明治/十九~二十世紀
28	高田海岸遺跡	散布地	沖縄県宮古郡多良間村	江戸/十九世紀
29	ファン・ポッセ号沈没地点	伝承地	沖縄県宮古郡多良間村	江戸/十九世紀
30	名蔵シタダル遺跡	散布地	沖縄県石垣市	室町/十五世紀

※ ⑩ 沈没船 (十九世紀のイギリス船) 埋没地点遺跡は、作品題箋では「推定いろは丸埋没地点遺跡」と表示しました。





プロローグ

海からよみがえる蒙古襲来

長 崎県伊万里湾に浮かぶ鷹島。都会から遠く離れ、目の前に広がる穏やかな海に緑豊かな島々が点々と連なる景色を眺めると、不思議と心が和みます。しかし、今から七百年以上も前に、この鷹島の沖で世界史上に名前を刻む海戦が繰り広げられました。鷹島は、暴風雨によって幕が引かれた、鎌倉時代の蒙古襲来の終焉の地として知られ、また、日本の水中考古学を育んだ地としても知られています。

蒙古襲来

十三世紀、騎馬民族であるモンゴル民族は、機動力を活かした戦術で周りの国々を征服して帝国となり、朝鮮半島（高麗）をも手中に収めました。第五代モンゴル皇帝フビライ（ハンは、文永十一年（一二七四年）、高麗から日本への遠征軍として大小あわせて九百隻の艦隊を編成しました。遠征軍は、対馬、壹岐を襲い、博多湾に襲来します。ところが、はっきりとした理由は分かりませんが、遠征軍は突如退却しています。この遠征は日本では文永の役と呼ばれています。その後、モンゴル帝国は領土を広げ、中国の南宋を滅ぼし、アジアの大帝國となったのです。

フビライは、その軍事力を背景に日本に入貢を求めますが、鎌倉幕府は拒絶しています。弘安四年（一二八一年）、フビライは再び日本侵略を試みるようになります。二度目の侵略では、前回の遠征軍を主軸とする東路軍と、元に降伏した旧南宋軍を主とする江南軍の二つの艦隊を編成しました。歴史書の記述によると、東路軍は九百隻・総兵力四万二千人、江南軍は総兵力十万人に対し三千五百隻以上の艦隊であったと言われています。幕府も大陸からの

侵攻を予測し、石築地（元寇防塁）を築き、応戦する構えを取っています。東路軍は前回と同様に博多を目指しましたが、防塁に上陸を阻まれて壹岐へ退却しています。また、江南軍は出発が遅れるなどトラブルが続き、結局、両軍が集結したのは、予定より二ヶ月遅れたことでした。一説によると、大艦隊が伊万里湾に移動した際、大風が吹き多くの船は波に吞まれて沈没したと言われています。嵐により沈没した船も数多くあったのは確かなのですが、混乱に乗じた掃討作戦で多くの者が捕虜になったと伝わっています。

蒙古襲来絵詞 模本

〔作品番号1〕

狩野晴川院養信筆

江戸時代 十九世紀

東京国立博物館

（原品）鎌倉時代 十三世紀

宮内庁三の丸尚蔵館

蒙古襲来（文永・弘安の役）の様子を克明に描いた絵巻で、自らの功労を示すため肥後の御家人竹崎季長が作成させたと伝わっています。「てつはう」をはじめ、武器・武器類や、船なども描かれており、当時の合戦の様子を知る上で貴重な資料です。



これまでの調査

鷹島には蒙古襲来にまつわる供養塔などが数多く存在し、また、水中からも漁師によって陶磁器類などが発見されています。この海域で最初に科学的な考古学調査を行ったのは、東海大学の茂在寅男で、一九八〇～八二年に実施されました。海洋音響装置により海底面で遺物が集積する可能性のある箇所を特定し、潜水士が潜って遺物の有無を確認する作業でした。船体は発見できませんでしたが、褐釉壺の破片や石弾など多くの遺物を発見しています。この調査の結果、鷹島の南岸、総面積約一五〇万㎡の海域が「周知の埋蔵文化財包蔵地」に指定されました。

区の港の整備に伴う調査を行っています。いづれも、周知の埋蔵文化財包蔵地とされていたからこそ調査を行うことができたといえます。

神崎港では大型木製梃や船体の部材、武器・

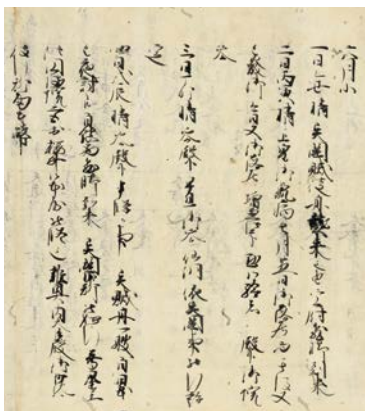
武器類、漆器類、四耳壺などの中国陶磁器が数多く発見されています。これらの出土品は海底で正確な位置を記録した後、引き揚げられて保存処理が施されています。現在では、出土品の多くは保存処理が終わり、松浦市鷹島歴史民俗資料館や同市立鷹島埋蔵文化財センター（現 松浦市立埋蔵文化財センター）にて保管・展示されています。

事前調査が行われることとなりました。このほか、九州大学の西谷正によって研究事業なども実施されています。一九九〇年代以降、九州・沖縄水中考古学協会（現 アジア水中考古学研究所）が鷹島町（現 松浦市）の委託を受け、床波港の防波堤工事や神崎地

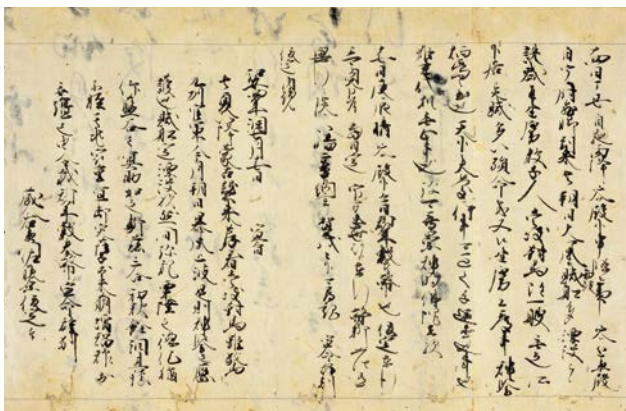
鷹島海底遺跡では緊急調査や学術調査が度々行われてきましたが、沈没船と呼べるような船体の発見には至っていませんでした。出土品の多くは単体で見えますが、船材が接合した状態

のものは十数点しかありません。いけば、バラバラに散った状態で見つかっています。これは七百年以上も前の嵐のすさまじさを語っているかのようですが、発掘された地点は、波の影響でいろいろなのが溜まりやすい場所であるとも考えられます。

ところで、遺跡の存在を周知することは、将来の新事実発見への鍵となります。例えば、鷹島の海底から押型文土器など縄文時代早期の遺物や動物の骨が発見されるなど、研究者が予想もしなかった場所から想定していなかった遺跡が発見されることもあります。



2-2 弘安4年(1281)6月条 2-1 文永11年(1274)11月条



2-3 弘安4年(1281)閏7月条



図4 調査中に発見された漆製品の周りの砂を丁寧に除去している様子

重要文化財
勸仲記(兼仲卿記)

広橋兼仲筆
鎌倉時代 十三世紀
千葉・国立歴史民俗博物館

〔作品番号2〕

京都の公家・広橋兼仲の日記。2-2には日本勢による「異族舟」夜討ちの知らせや、2-3には、大風により「賊船」の多くが漂流したとの知らせが大宰府より到来したことなど蒙古襲来の様子を記した一級資料です。



褐釉壺
【作品番号15】

長崎・鷹島海底遺跡 鎌倉時代 十三世紀 長崎・松浦市教育委員会

鷹島海底遺跡の出土品のなかでも、褐釉の壺が最も多く報告され、中国江蘇省産の四耳壺が大半を占めています。食料や水などが詰められていたと想定されています。この四耳壺がそうであるように、鷹島の南岸を歩くと今でも多くの遺物を見ることができます。



長崎県指定
管軍総把印
【作品番号3】

長崎・鷹島海底遺跡
鎌倉時代 十三世紀
長崎・松浦市教育委員会

鷹島の神崎海岸で偶然に発見された青銅印で、その印面には元の国字パスパ文字で「管軍総把印」、背面には「至元十四年（二二七七）九月造」と刻まれています。元軍の将校が使用したものと考えられ、蒙古襲来があったことを直接示す証拠といえます。

琉球大学による調査

二〇〇〇年以降、鷹島海底遺跡の調査は新しい時代に入っています。市町村合併により松浦市が遺跡の調査を進めることになりました。また、琉球大学の池田栄史が二〇〇六～一〇年度と二〇一〇～一五年度の十年間におよぶ継続的な調査を行っています。遺跡の全容把握のため、音波を利用した探査機器類を使用し、伊万里湾全域の海底地形図の作成と、堆積層の調査を行いました。得られたデータを分析し、不自然な反応のあった地点に水中ロボットカメラや潜水士による目視調査を行いました。伊万里湾は、砂（シルト）の堆積量が多く、沈没船の船体などが海底面に露出している可能性は低いと考えられます。そのため、海底





図6 鷹島から眺めた伊万里湾と海底遺跡の一部
この海域に数千隻の船が集まっていたと考えられています。



図5 伊万里湾と鷹島周辺の略地図（黄色部分が鷹島海底遺跡、網かけ部分が国指定史跡の範囲）

の砂の堆積層の中から遺跡を探し出す作業が必要であることが分かりました。海岸や海底で採集された遺物の情報をはじめ、これまでの調査の結果などから沈没船がありそうな位置を絞り込み、地層断面図を10m間隔で作成しました。その結果、神崎地区の沖に沈没船と思われる異常反応が数箇所認められました。

それらの異常反応地点で試掘調査を行った結果、二〇一一年、初めてまとまった形で船体が確認され、鷹島一号船と名づけられました。船体の構造や鉄釘をたくさん使用していることなどから、中国で作られた船であることが分かりました。この発見を受け、鷹島海底遺跡の一部が国の史跡鷹島神崎遺跡として指定されました。そして、二〇一四年の調査では、新たに船体が発見され、鷹島二号船と呼ばれています。当時としては中型の船と思われるのですが、船首が尖り、全体的に細長い形をしています。スピードを重視した、兵を陸まで運ぶ上陸船だったのかもありません。どちらの船も遺跡の保護を重要視し、引き揚げずに水中で保存されています。

水中遺跡は陸の遺跡では残りにくい有機物や鉄製品などもよく残るため、多種多様な出土品があり、また、出土量も多いことが特徴です。そのため、全ての遺物を引き揚げると、保存処理に多くの費用と時間がかかってしまいます。今後、水中遺跡の発見があった場合には、引き揚げずに現地（水中）で保存するほうが遺跡の保護には有用であるという意見が強く主張されるようになっていきます。



青なご
〔作品番号4〕

長崎・鷹島海底遺跡
鎌倉時代 十三世紀 長崎・松浦市教育委員会

金属製品（特に鉄）は、長期間海水に浸かると周囲の砂などを取り込みながら錆さびてふくれしていきます。中身は空洞化しており、原形をとどめていないことがあります。



矢束やたば
〔作品番号10〕

長崎・鷹島海底遺跡
鎌倉時代 十三世紀
長崎・松浦市教育委員会

矢束を携帯する際に使用した袋（胡籙こさく）の一部が表面に付着しています。鉄鏃てつそくは長さ六cmと大きく、また、矢のシャフト（筈はず）部分は木でできていました。



てつほうてつほう（球状土製品きゅうじょうどせいひん）

〔作品番号5〕

長崎・鷹島海底遺跡
鎌倉時代 十三世紀
長崎・松浦市教育委員会

蒙古襲来絵詞にも炸裂さくれつする様子が描かれている「てつほう」。直径一五cmほどの陶製の器に火薬や鉄片などを詰めて炸裂させたようです。底部は転がらないよう少し平らに作られています。

銅銭
〔作品番号12・13・14〕

崇寧重宝・福祿壽昌・太平通宝

長崎・鷹島海底遺跡
鎌倉時代 十三世紀 長崎・松浦市教育委員会

鷹島の海底からはさまざまな銅銭が出土しています。太平通宝八十八枚が一塊で発見され、また、福祿壽昌など縁起の良い文字の銅銭が多く発見されています。壓勝銭と呼ばれる「お守り」であったと考えられています。
（*画像は一部展示しないものも含む）



木製櫛
〔作品番号22〕

長崎・鷹島海底遺跡
鎌倉時代 十三世紀 長崎・松浦市教育委員会

どの時代のどこの国の船からも、櫛はしばしば発見されています。航海中は髪を洗うこともほとんどないため、シラミの除去に重宝します。
（*画像は一部展示しないものも含む）



漆塗椀
〔作品番号20〕

長崎・鷹島海底遺跡
鎌倉時代 十三世紀 長崎・松浦市教育委員会

鷹島では、漆塗り製品など陸の遺跡ではあまり見ることのない有機物が多く出土しています。この椀の底には、「張」と刻まれています。個人の持ち物だったのでしょいか？



図7 漆塗椀の発見時の様子





水中に遺跡あり

―水中考古学のあけぼの―

果 たして日本の周りにはどれほどの水中遺跡があるのでしようか？その正確な数はわかりませんが、相当な数の「海揚がり品」が日本各地から発見されています。海や湖から発見された品々は、人々の関心を集めたようですが、多くは記録されずに行方がわからなくなってしまうようです。明治・大正と時代が進むと、過去への探究心はふくれ上がり、海揚がり品を調べたり、また、実際に「水中遺跡」を調査する研究者が現われます。初期の調査は、船の上からの調査が主体であり、水中の遺跡を実見して調査することとはほとんどありませんでした。

海揚がり品

船が沈んでいる場合、同時代の似たような完形品が同じ海域から多く発見される傾向があります。そのような場所のひとつに、砲台跡などの廃墟が有名な紀淡海峡の無人島、友ヶ島の北側の海域があります。中国産の陶磁器が数多く引き揚げられることが江戸時代から知られていたようです。一九五八年、森浩一が海から発見されたこれらの遺物を調べ、海底遺跡の存在を指摘しました。淡島神社には百点に近い海揚がり品が所蔵されており、後に多くの研究者によって調査が進められました。引き揚げ品の多くは、十五世紀頃の中国で作られた青磁類ですが、江戸時代の肥前系陶磁器も見つかっています。室町時代と江戸時代、二隻の沈没船が海の底に眠っているのでしょうか。友ヶ島の海底調査はまだ行われていないため、果たして本当に沈没船があるのか詳細は謎のままです。

染付碗 [作品番号28]

和歌山・
沖ノ島北方海底遺跡
江戸時代 十八世紀
和歌山・淡島神社

海揚がり品といわれている染付碗で、外面に牡丹唐草文、内底部に梅月文が描かれています。



青磁碗 [作品番号27]

和歌山・沖ノ島北方海底遺跡
室町時代 十五世紀 和歌山・淡島神社

蓮弁文を彫刻する龍泉窯系の青磁碗で、友ヶ島で最も多く見つかっている種類の碗です。室町時代の初めには、すでに紀淡海峡を貿易船が行き交っていたと考えられます。



諏訪湖の調査

明治四十一年（一九〇八年）、諏訪湖畔にある小学校の教員だった橋本福松は、自然科学的な諏訪湖の調査に助手として加わっていました。橋本は、曾根と呼ばれる水域で、偶然にも二個の石鏃をすくい上げました。この発見は東京帝国大学の人類学者坪井正五郎に知らされました。偶然にも、ヨーロッパで湖底より石器時代の遺物が発見されており、「湖上住居址（杭上住居）」の研究が話題になっていたのです。坪井は、日本にも湖上住居址があったという仮説を立て、それを証明するため、

日本で初めて学術的な水中遺跡の調査に踏み切ったのです。しかし、実際に潜水することなく、鋤簾で湖底の泥をすくって遺物を確認する調査のみで、遺跡の詳細を解明することはできませんでした。

大正時代に入ると、鳥居龍藏などが曾根遺跡から遺物を採集し、調査を続けていました。その後、昭和時代になると藤森栄一が陸の遺跡との関係などを総合的に研究し、曾根周辺はもともと陸地であったと推測しています。諏訪盆地は過去から現在に至るまで沈下が続けており、水中から縄文早期以降の遺物が発見されていないことから、縄文中期には水没したと考えられます。

藤森は、水中遺跡を理解するためには水中で考古学者が直接発掘しなければならぬと問題提起をしましたが、技術的制約の克服や資金の確保ができず、ついに調査に至ることはありませんでした。



図8 諏訪湖を望む



図9 曾根遺跡で採集された石鏃
過去に諏訪湖から収集された石鏃は、このように標本として保管されている。





葛籠尾崎湖底遺跡

日本最大の湖である琵琶湖の北端に程近い葛籠尾崎^{つづらおきざき}半島の東側、水深七〇mほどの湖底谷に葛籠尾崎湖底遺跡があります。大正十三年（一九二四年）、尾上^{おのうえ}地区の漁民のイサザ漁の網に縄文時代から古墳時代にかけての完形品を含む土器などがかかりました。これらの引き揚げ品が考古学者の目に触れ、学術雑誌に紹介されると、遺跡形成の要因などについて議論が沸き起こりました。琵琶湖の引き揚げ品は考古学界をたびたび賑わせましたが、本格的な調査には至りませんでした。

一九五〇年代に入ると、地元の湖北町（現 長浜市湖北町）尾上出身で九州帝国大学（現 九州大学）にて考古学を学んだ小江慶雄が、海外の水中考古学の成果を取り入れて本格的な水中での調査を提唱しました。小江は一つの湖底遺跡の解明だけではなく、水中考古学という学問そのものを日本に定着させることも目指しました。また、琵琶湖総合開発に伴う水中遺跡を把握する事業などでも葛籠尾崎においてたびたび調査が進められています。

現在、百ヶ所ほどの水中遺跡が琵琶湖で発見されています。水中遺跡の多くは比較的浅い位置にあり、葛籠尾崎湖底遺跡はその中で最も深い位置にあります。また、出土品は破片ではなくほとんど完全な形で残っています。長い時を経て、多くの研究者が興味を持って調査を行っていますが、遺跡形成の要因すら判明していません。謎の水中遺跡です。二〇一七年現在、立命館大学を中心とした研究グループが、水中ロボットなど最新の技術を応用し、その謎の解明に向けて調査を進めているところです。

column

遺跡形成の要因

水中遺跡が学術的な調査の対象となったとき、多くの研究者は、遺跡形成の要因について議論を交わしました。なぜ水中に遺跡があるのか？その解明に主眼が置かれました。もともとその場所に住んでいたと仮定すると、湖上住居址、もしくは、陸であった場所が何らかの理由により水没した可能性なども考えられます。また、遺物が広範囲に広がっているのであれば、河流や土砂崩れなどにより二次堆積して形成された遺跡も考えられます。そのほか、人の行為によってうまれた遺跡もあります。不要になったものが破棄された場合もあれば、祭祀的な意味合いを持ってその場所に投下されたこともあったかもしれません。



深鉢^{ふかばち}
〔作品番号31〕

滋賀・葛籠尾崎湖底遺跡
縄文時代 五千～四千年前
滋賀・葛籠尾崎湖底遺跡資料館

大正時代に葛籠尾崎で引き揚げられた縄文土器の一つだと伝わっています。琵琶湖特有の湖成鉄^{まき}（土器表面の黒いシミ）が見られます。

海底発掘調査のはじまり

明 治から昭和にかけて、水中遺跡への関心は芽生えたものの、考古学者自らが水中で発掘を行うまでには至りませんでした。一九五〇年代、国内の埋蔵文化財保護の体制が整い始めると、琵琶湖や網走湖などにおいて小規模ながら水中での発掘作業が実施されるようになりしました。自治体が主体となり実施した最初の本格的な水中遺跡の調査は、北海道江差町の開陽丸かいようまるの発掘です。

開陽丸の調査を皮切りに、鷹島海底遺跡をはじめ他の水中遺跡の調査が本格的に動き始めます。水中遺跡を本格的に学ぶ研究者や非営利団体などが育ち、さまざまな試行錯誤を繰り返しながら、水中考古学がひとつの学問として成熟していきました。

—水中での学術調査の歴史—

「開陽丸」の調査

徳川幕府の「開陽丸」は悲運の軍艦として知られています。幕府がオランダに注文した最新鋭の軍艦でしたが、建造開始から日本へ向かう間に時代は倒幕へ向かっていました。旧幕臣榎本武揚らは開陽丸を乗っ取り、北海道へ向かいました。箱館戦争はこだて（一八六八～六九）のさなか、新天地で待っていたものは冬の嵐でした。明治元年（一八六八年）十一月、軍艦としての活躍を見ることがなく江差港で沈没し、その短いキャリアを終えました。

開陽丸の沈没地点は、忘れられることなく地域の間で語り継がれていたようです。大正時代などにも時折大砲などが引き揚げられた記録が残っています。高度経済成長期になると、全国で湾岸整備などが進められるようになります。江差港もその対象となりました。一九七四年、再び開陽丸のものと思われる積載物が海底で確認され、埋蔵文化財包蔵地として周知され、湾岸整備に伴う埋蔵文化財の調査が実施され

ました。この調査は、地方自治体が主体となって行う初めての大規模発掘調査でした。陸の調査と同じように一〇mの区画を組み、発掘を進めます。堆積した砂を排土装置（エアリーフト）で吸

い上げて、遺物の位置の記録や写真撮影を行います。基本的な作業は陸の発掘と同じですが、潜水時間の制限や慣れない機材を使用している調査など手探りで作業が行われました。調査はおよそ十年にわたり、大砲五門、砲弾二千五百発をはじめ、多くの金属製品や船の帆走に使用された木製品など三万点以上の出土品が引き揚げられました（図10）。また、船体の一部も残っていました。船体は引き揚げずに、シートをかぶせて海底で保存する処置がとられています。

水中から引き揚げられた出土品それぞれに最適な保存処理を行う必要があ



図10 開陽丸から発見された榴弾りゅうだんを水中で調査している様子

ります。脱塩処理などから始めると、展示できるまでに一年や二年では終わりません。また当時、これらの作業についてのマニュアルがない状態で進めなくてはなりません。文化財担当者や研究者などさまざまな方の努力の結果、現在、開陽丸の出土品を江差町の開陽丸青少年センターで見ることができます。



有機物の保存について

水中遺跡は、陸の遺跡に比べて出土品の保存状態が良い場合が多くあります。特に遺跡が砂に埋もれた場合、酸素から完全に遮断されるため、木材などの有機物を破壊する細菌といった微生物が活動できなくなります。陸上ではほとんど残ることのない紙、米や動物の骨などの食料も残っていることがあります。

炭化米
〔作品番号54〕

長崎・鷹島海底遺跡
鎌倉時代 十三世紀
長崎・松浦市教育委員会



鷹島海底遺跡からも有機物が多く出土しています。出土品としても重要ですが、特に動物の骨や炭化米などは、海戦における食料調達事情を詳しく知る上で貴重な資料です。

海中から引き揚げられた
書籍（一部）〔作品番号53〕

北海道・開陽丸遺跡
江戸時代 十九世紀
北海道・江差町教育委員会

水中では、出土品の保存状態が驚くほど良好な場合があり、紙も例外ではありません。海の底には、貴重な文献史料もまだまだ残っている可能性が秘められています。

拳銃
〔作品番号41〕

北海道・開陽丸遺跡
江戸時代 十九世紀
北海道・江差町教育委員会

開陽丸から出土したもので、坂本龍馬が愛用したと伝わる拳銃と同型といわれています。



坂本龍馬の「ころは丸」

一九八八年、鞆の浦の有志が結成した「鞆を愛する会」が中心となり、広島県福山市の沖合い、水深二七mの海底から一隻の沈没船を発見しました。そしてこの船が、坂本龍馬ゆかりの「ころは丸」ではないかと各社紙面をにぎわせました。慶応三年（一八六七年）、海援隊が乗るいろは丸は、紀州藩の船と衝突し沈没したと記録されています。紀州藩に過失を認めさせた龍馬は、多額の賠償金を得ています。わが国初の海難審判事故と言われるいろは丸事件。水中考古学の調査が、新しい歴史の解釈を問いかけています。

京都の水中考古学研究所が船体の特定を目的とした海底調査を実施しました。船のパーツや陶磁器類、滑車などを引き揚げ、積載品の種類や年代がい



いろは丸の記録とほぼ一致することが確認されました。海底の調査はたびたび実施され、二〇〇五年の調査で第四次を数えました。出土品の中には、顔料として使われる水銀朱や刀の柄などを用いられる鮫皮など長崎で仕入れたと思われる輸入品も含まれており、当時の交易の様子を伝えています。

いろは丸は、「発見されていないものの」に注目が集まる珍しい遺跡です。海難審判の席で龍馬は最新式のミニエー銃四百丁を運んでいたと主張しています。しかし、水中遺跡からは、銃は一丁も発見されていません。



木製滑車ちくせいかつしや
「作品番号36」

広島・沈没船（十九世紀のイギリス船）埋没地点遺跡
江戸時代 十九世紀
広島・福山市立鞆の浦歴史民俗資料館

いろは丸からは、積荷の他に操船に使用する道具も発見されています。滑車などから、船が造られた時代や造船地を特定する情報を得ることができそうです。



図11 長崎市歴史民俗資料館の調査で発見された「いろは丸」と思われる絵図

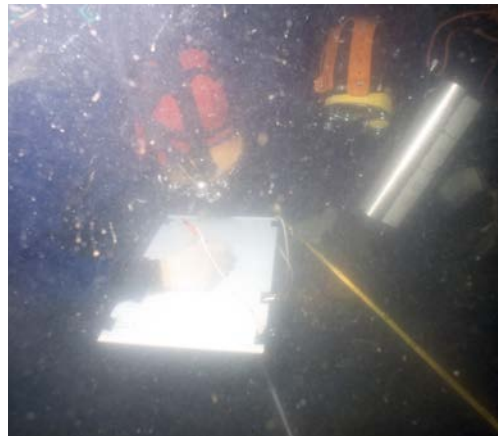


図12 いろは丸海底発掘の様子

column

発掘調査について

水中での発掘作業にはさまざまな制約があります。安全に作業するためには、1回の潜水で1時間未満、1日に2回しか潜れません。また、水深が深くなると1回の潜水時間は短くなります。場所によっては、光があまり届かない中での作業を強いられます。ライトを使うと、水中に漂うゴミやプランクトンに光が反射するため逆に見づらくなることもあります。



西浜千軒遺跡

琵琶湖周辺の遺跡からは、地滑りや液状化現象の痕跡が見られ、歴史的に地震が多い地域であることが分かります。一五八六年、日本を訪れていたイエズス会宣教師のルイス・フロイスは、突然の地震により「大地が割れ、家屋が呑み込まれる」様子を著作『日本史』の中でつづっています。天正大地震では、長浜城も大きな被害を受けたといわれています。また、長浜市にはかつて「西浜村」と呼ばれる集落があり、湖底に没したという伝承が語り継がれています。

二〇一二年度から、滋賀県立大学の学生が立ち上げた研究会「琵琶湖水中考古学研究会」（代表 中川永）がこの伝承の村を探すべく潜水による調査を行っています。調査の結果、一石五輪塔や五輪塔の一部、石仏などが発見されました。また、出土した土器片などから、これが室町時代後期の遺跡であり、人為的に造られた方形区画を持つ墓地であることがわかりました。西浜千軒遺跡は、地震による地滑りで水没した当時の村の様子をそのまま伝える貴重な遺跡として新聞などで報じられました。そして、それ以上に注目を集めた理由が、大学生を中心としたメンバーによる調査で大きな成果を上げたことにあります。

エルトゥールル号

明治二十三年（一八九〇年）九月、明治天皇の歓迎を受けたオスマン帝国初の親善訪日使節団は、木造フリゲート艦エルトゥールル号に乗り、横浜を出港し帰路につきました（図13）。しかし、台風による強風におおられ、本州最南端の町、大嶋村（現 和歌山県東牟婁郡串本町）^{かしのさき} 橙野崎沖で座礁した



一石五輪塔 [作品番号52]

滋賀・西浜千軒遺跡 室町時代 十五世紀 滋賀県立大学

一石五輪塔は、一つの石から彫りだして造られ、供養塔として使われていました。西浜千軒遺跡からは、花崗岩のほかに砂岩で造られた石塔が発見されています。

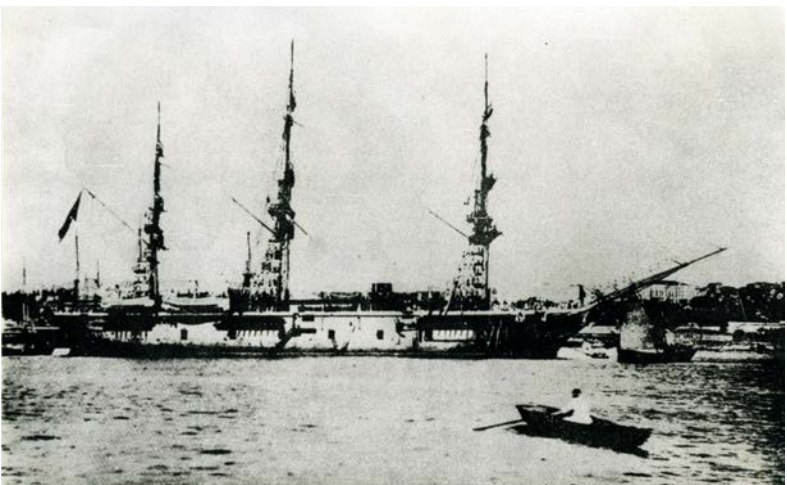


図13 ポスボラス海峡に停泊中のエルトゥールル号

際、エンジンが水蒸気爆発を起こしてしまいました。異常事態に気が付いた村の住民は、総出で生存者の救護に努めたといわれています（図14）。六百六十九名しかいませんでした。エルトゥールル号の沈没を聞き、多くの義捐金^{えんぎん}が寄せられました。

レジャーダイビングが盛んな串本町では、エルトゥールル号が座礁した付近から当時のものと思われる遺品が発見されています。二〇〇七年、トルコの研究者を中心とするエルトゥールル号プロジェクトが組織され、沈没地点周辺の探査や発掘作業などが始まりました。発掘調査プロジェクトは継続的に行われ、積荷や軍備品など八千点以上の遺物が引き揚げられています。これらの出土品は、串本町に新設されたリサーチセンターで保存処理が行われており、開陽丸、鷹島海底遺跡に継ぐ大規模プロジェクトとなっています。このプロジェクトは、両国の友好を目的として、遺跡の活用など地域に根付いた活動を進めています。和歌山県の学生や生徒を対象に、訪問講演や課外授業として保存処理体験なども行っています。

親日国となったトルコ

民間人ながら義捐金を集めるのに中心的な役割を果たしたのが、山田寅次郎という人物で、彼はトルコに渡りオスマン皇帝に拝謁するほど歓迎を受けました。彼は、そのままイスタンブールにとどまり、両国の交流を深める活動を続けたと言われています。その後起こった日露戦争中の日本海海戦での勝利の報を受け、当時ロシアと敵対していたトルコでは、日本を盟友と見るほど日本の人気は高まりました。エルトゥールル号の事件は、日本ではほとんど忘れられた存在でしたが、トルコでは長らく人々の記憶に残っていたようです。近年、串本町とトルコの交流事業は盛んに行われており、トルコ大統領が遭難の地を訪れた際など、たびたびメディアで取り上げられています。この海難事故をテーマとした映画や小説などが制作され、日本でもエルトゥールル号について知られるようになりました。

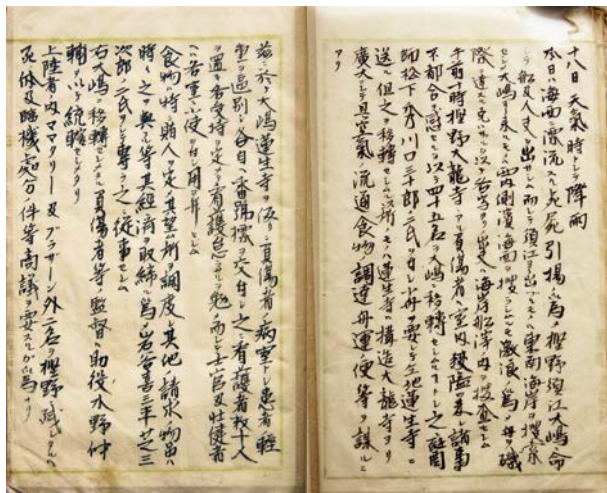


図14 『沖日記』(所蔵：串本町)の一部

海難のあった2日後、9月18日に行なわれた遺体の収容や遺品収集の様子などが綴られている。大島村の沖周村長の日記には、人々が親身になって見知らぬ異国人を助けた様子が描かれています。また、明治期の災害発生時の対応から中央と地方の関係など当時の様子を知る上で他に例を見ない貴重な資料となっています。

ペーパーウエイト「作品番号43」

和歌山・紀伊大島樫野崎沖
明治時代 十九世紀
和歌山・串本町

このガラス製のペーパーウエイトは、エッチングにより馬の絵が描かれています。光の屈折を利用して、複数の馬が描かれているように見え、船長か将校など個人の持ち物であったと推測されます。



横浜焼 カップ・ソーサー

「作品番号44・45」

和歌山・紀伊大島樫野崎沖
明治時代 十九世紀
和歌山・串本町

突然の開港により国内外の商人が集まる町となった横浜では、陶工も地方から集まりました。「和の伝統・技法」に「洋のスタイル」をいち早く融合した「横浜焼」が作られるようになります。海外で注目を浴びますが、日本国内において横浜焼はほとんど流通しませんでした。長い間水中にあったせいか串本町で発見された横浜焼は塗料がはがれてしまっています。



第3章

最新の水中考古学調査

— これからの水中考古学 —

今、水中考古学の研究は、新しい時代を迎えようとしています。科学技術の進歩に伴い、水中作業の効率が格段に飛躍したこと、遺跡を探す手法が手軽に利用できるようになったこと、新しい保存処理方法が開発されていることなど、技術面での進歩が大きく貢献しています。しかし、それ以上に、水中遺跡に対する考え方、特に活用する方法で進展が見られます。いかに「見えない水中遺跡を見せる」かを研究者が考えて、研究の成果を広く伝える努力、水中遺跡の存在を知ってもらう努力を行っています。第3章では、近年実施されたさまざまな取り組みと新しい調査手法を紹介します。

山見沖海底遺跡と
前方湾海底遺跡

九州の西の海上に浮かぶ五島列島は、古来より活発な海上活動の場でした。八世紀頃から遣唐使船が五島列島を経由して中国大陸へと向かい、また、アジア各地から日本へ向かった商船なども、この経路を利用したと考えられています。小値賀島の東側、山見沖（通称「ツボアテ」）と呼ばれる海域から、十六世紀末～十七世紀初頭のタイ産の陶器が漁師などによって引き揚げられており、水中考古学調査の必要性が提唱されました。鷹島でも調査を行っていたアジア水中考古学研究所が小値賀町教育委員会からの委託を受け、二〇〇一年から山見沖海底遺跡の調査が始まりました。

最初に、遺物の分布を調べるため、海底の岩に鉄釘を打ち込み基準点を設置し、区画を作りながら遺物を探しました。サンプルとして、およそ八十点の出土品を引き揚げています。十六世紀～十七世紀初頭の大量のタイ産の、しかも同一器種が確認され、一つの

船で運ばれていた可能性が指摘されます。一方、中国産の陶磁器は八点しか確認されていません。タイを出発した船が、中国を経由して日本へ向かった可能性も考えられます。時代としては、ちょうど東南アジアで日本人町が形成される時期にあたります。果たして船に乗っていたのは、どのような人々だったのでしょうか？

山見沖海底遺跡調査の成功をうけ、前方湾内の比較的広い範囲での潜水探査が計画されました。二〇〇五年から実施された調査では、湾の北側に遺物が集中している傾向が見られました。潜水調査の結果、椀石二本のほか、白磁碗や龍泉窯系の青磁碗などが発見されました。出土品は主に十二世紀～十三世紀のものであると考えられています。船体の確認はできませんでしたが、中国と日本の間をつないだ貿易船が沈んでいたのでしょうか？



山見沖海底遺跡出土品

〔作品番号63～67〕

長崎・山見沖海底遺跡

室町時代 十六世紀

長崎・小値賀町教育委員会

小さな鉛のインゴット（三角錐状の地金）と同じものがタイのシーチャン沈没船で発見されており、貴重な資料といえます。タイのハンネラ土器や中国産の青花瓶などが出土しています。

遺跡見学会

遺跡を知るには現地で実際に遺跡を見ることが一番ですが、水中遺跡となると、なかなか見に行くことができません。2007年8月、アジア水中考古学研究所が中心となり、小値賀島にて海底遺跡の現地見学会が実施されました。日本の水中遺跡で行われた、潜水を伴う最初の本格的な遺跡見学会でした。見学会は、潜水グループと船上グループに分かれて行われました。潜水グループは、設置されたキャプションや耐水用紙で作られたパンフレット、そして、水中スピーカーによる解説を聞きながらガイドロープに沿って移動します。船上グループは、ビデオカメラを持ったダイバーから送られてくる映像を、リアルタイムで見ることができました。水中遺跡の見学会は、透明度が高く初心者のダイバーでも潜水できる場所に限られます。沖縄県や鹿児島県などでは、数年に一度、水中遺跡見学会が開催されるようになってきています。今後、ますますこのような取り組みが増えていくと考えられます。



図15 水中遺跡見学会にて記念撮影



前方湾海底遺跡出土品

〔作品番号68〜72〕

長崎・前方湾海底遺跡

平安〜鎌倉時代 十二〜十三世紀

長崎・小値賀町教育委員会

龍泉窯系青磁、同安窯系青磁皿、天目（小碗）などが発見されています。出土品の時代の幅は狭く、一隻の船の積み荷であったのでしょうか。



倉木崎海底遺跡

鹿児島県奄美大島の西側、焼内湾の入り口に位置する枝手久島と本島間の細い水路に倉木崎海底遺跡があります。一九九七年から二〇〇一年にかけて宇検村教育委員会が、青山学院大学の協力を得て海底での調査を実施しています。水深は浅く、また、多くの遺物は海底面に露出した状態で発見されました。十二〜十三世紀ごろの中国の青磁や白磁などの陶磁器約二千三百点が引き揚げられました。これらの遺物は、博多遺跡群（福岡市博多区）から出土する資料とよく似ており、中国から陶磁器を積んだ船が、この地域に寄港したとみられます。中世の東シナ海をめぐる交易の実態を解明する上で貴重な遺跡として知られています。

青山学院大学の調査が行われた後、しばらく調査が行われることはありませんでした。二〇一四年、文化庁の委託事業の一環として九州国立博物館

が、水中遺跡の探査機材の実験を兼ねた調査を実施することになりました。数種類の探査機材を用いて、船体の有無の確認、また、遺跡形成の要因について科学的な検証を行いました。調査の結果、堆積層は薄く、船体が沈んでいる可能性は低いと考えられます。また、磁気探査機や金属探知機にほとんど反応がなく、鉄釘などの金属製品が発見されていないことを考えると、船材は存在していないと判断できます（図16）。

水中ロボットによる探査や、デジタル写真を利用した遺跡のデジタル復元なども試験的に行いました。また、二〇一五年には宇検村教育委員会が水中遺跡見学会を主催しました。当初の予定の倍以上の応募申し込みがあり、急遽規模を大きくして開催するほどの人気でした。参加者は、箱メガネを使って海底に広がる陶磁器類などを観察しました。



図16 倉木崎海底遺跡での金属探知機を使った調査の様子



倉木崎海底遺跡出土品

〔作品番号55〜62〕

鹿児島・倉木崎海底遺跡
平安〜鎌倉時代 十二世紀
鹿児島・宇検村教育委員会

出土品のほとんどが陶磁器で、船上生活に必要な遺物は見つかっていないため、船が沈んだのではなく、何らかの理由により、積荷の一部をまとめて破棄したと思われます。

事前探査

1960年代、水中考古学が学問として発展を始めた当初、水中の遺跡を見つけることは、砂漠から針を見つけるより難しいと思われていました。これは、水中遺跡の絶対数が少ないという思い込みと、海底面を直接見ることができないという技術的制約によるものでした。しかし、世界各地で水中遺跡の発見が相次ぐと、その数が想定以上に多いことがわかりました。例えば、デンマークでは石器時代の水中遺跡だけで数千件確認されています。また、近年の



図17 探査機器を船に設置している様子

科学技術の進歩により、海底面を映し出すことも容易になりました。水の中の調査には、音波（ソナー）がよく使われます。海底面に向かって音波を発信し、その反射角度や速度から海底面までの距離を測り、それを映像化しています。数十年前までは、専用のコンピューターや大きな機材が必要でしたが、最近では、市販のノート型パソコンにUSBで接続して使う簡易的な機材もあります。音波装置を水の中に入れ、探査したいエリアを往復して地図を塗りつぶしていくような作業を繰り返します。また、金属製品を探すための磁気探査機や金属探知機など、調査の目的によってさまざまな探査機器を使用します。

探査技術の進歩は目を見張るものがありますが、実は水中遺跡を発見するのに最も有効な手法は、今も昔も変わっていません。それは、漁師など常に海や湖などと接している人々への聞き込み調査です。沈没船などは漁礁のように魚が集まるポイントとなっている場合もあり、海揚げり品の情報も遺跡を発見するためには重要となります。

相島海底遺跡

古くから海上交通の要所として知られる福岡県新宮町相島^{あいのしま}。この島には相島積石塚群^{つみいしづかぐん}や江戸時代の朝鮮通信使の客館跡があり、小さいながらも歴史に満ちた島として知られています。島の南西沖には鼻栗瀬^{はなぐりせ}（通称メガネ岩）が海面に姿を現しています。相島の水中遺跡は、その鼻栗瀬のそばにあります。相島の沖では、漁師により多数の瓦が引き揚げられていましたが、福岡市博物館に持ち込まれた瓦に「警固」の銘の陽刻があることがわかり、考古学者の注目を集めました。「警固」の銘を持つ瓦は、斜ヶ浦瓦窯跡^{ななめがうらかわらがまあと}（福岡市西区）と平安京の朝堂院にしか出土例がなく、貞観十八年（八七六年）の朝堂院の焼失・再建の際に九州から平安京に向かう船に積まれていた可能性があ

ります。

近年、アジア水中考古学研究所が鼻栗瀬周辺の潜水調査を実施し、水中にある瓦を発見しています。瓦を積んだ沈没船があったと仮定すると、瓦が集積している場所があるはずです。二〇一五年、九州国立博物館が相島周辺海域の探査を実施しました。探査の目的は瓦の集積を発見することでしたが、倉木崎海底遺跡と同様に、さまざまな探査機器の有効性を検証することも一つの目的としていました。相島在住の歴史愛好家で漁師

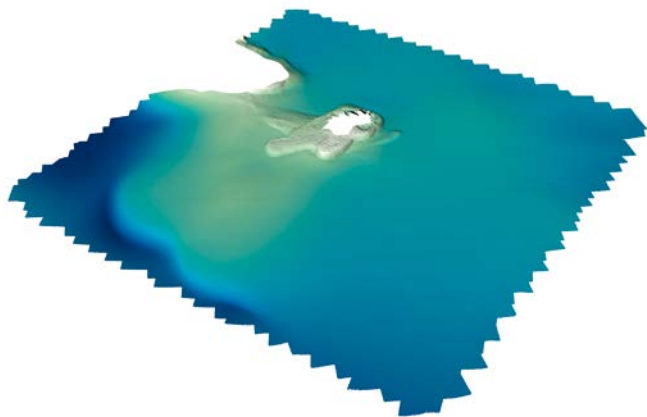


図18 相島の南東部分を計測した海底地形図

白い部分は陸地を表わし、左上は島の先端部分、中央は海面に飛び出したメガネ岩です。青色が濃くなるにつれ水深の深さを表わしています。遺跡の広がりもこの地形図を使って正確に把握することができます。また、海底の地形を把握することは、遺跡周辺の環境を読み取り、遺跡形成の要因を考える上で重要です。

でもある方からの情報をもとに、水中ロボットによる探査で瓦が数枚集まっていた場所を発見することができました。二〇一六年度からは新宮町教育委



員会が主体となり潜水による調査が進められ、広範囲に瓦が散乱している場所を特定しています。今後の調査で、沈没船が発見されるかもしれません。

平瓦・丸瓦ひらがわ まるがわ「作品番号83・84」

福岡・伝相島沖
平安時代 九世紀
福岡大学考古学研究室

これまでにかなりの数の瓦が引き揚げられてきましたが、「警固」の銘を持つ瓦は多くはありません。平瓦が最も多く発見されています。



ファン・ボッセ号の調査

十九世紀中葉、一隻のオランダ商船が宮古島と石垣島のちょうど中間にある平らで小さな多良間島で座礁しました。東アジアの海はヨーロッパ列国が介入し、日本もアメリカのペリー提

督来航により、国の運命を決断する時が迫っていました。この船の座礁記録は、琉球の歴史書に簡単な記述があるのみでした。座礁地点と伝わる高田海岸では、中国産の陶磁器片などを拾うことができます。また、オランダ船と言われるアンカーも引き揚げられ、地元で保管されています。

近年、オランダの文献を調べた金田明美の研究により、この船は上海からシンガポールへ向かっていたファン・ボッセ号（二八五七年沈没）であることが判明しました。海岸で収集された陶磁器は、東南アジアで広く流通していた景德鎮窯で焼かれたものが主で、文献史料調査と考古学調査の結果が一致しています。

ファン・ボッセ号の遺物は海底にも広がっています。多良間村では地域の人々の歴史を守る意識が高く、地元のダイビン



図19 多良間沖で発見された金属製の箱

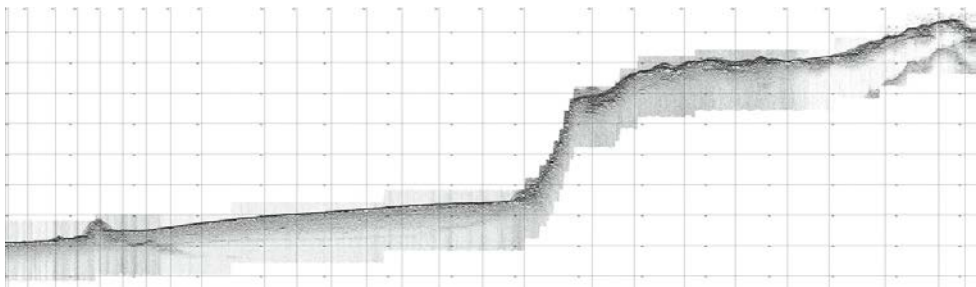


図20 多良間沖海底の地層断面図

向かって右側の高い（水深が浅い）リーフ部から急に水深が深くなり、40mほど落ち込んでいることがわかります。海底の断面図から大きな構造物が埋もれていないか、また、堆積状況の確認ができるので、掘削することなく遺跡を見つけることも可能となります。

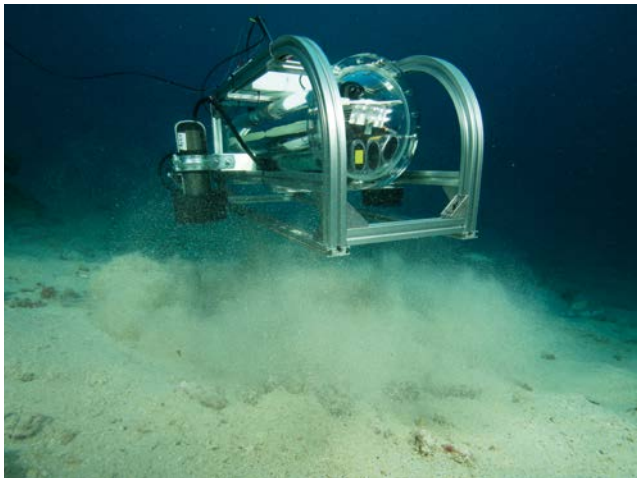


図21 東海大学海洋学部が開発した水中ロボット「ケイちゃん」
【作品番号26】



図22 ケイちゃんを利用した学生向け体験実習の様子

水中ロボットを利用した調査

水中ロボット、もしくは、ビデオカメラを取り付けた遠隔操作ができる潜水艇は、水深の深い場所での探査や、初めて潜る場所の安全確認など、水中

グショップが遺跡保護の役割を果たしています。また、レジャーダイビングのスポットとして活用しており、多くの人に水中遺跡に触れる機会を提供しています。ヨーロッパなどでは、ダイビングショップが公式に遺跡の保護を担う体制が確立している地域もあり、水中遺跡保護の先進的なあり方の一例と言えます。

九州国立博物館は、二〇一五年度から水中探査機材を用いて高田海岸の調査を実施しています。多良間村の協力のもと、潜水調査を行い遺跡の全容解明を目指しています。

考古学の調査に役立っています。水深四〇mを超える遺跡に、人間が直接潜って調査を行うのは、安全面・効率面から見て現実的ではありません。空を飛ぶドローンが安価になり、さまざまな場面で利用されていますが、水中ロボットも開発が進んでいます。東海

大学や立命館大学などは、水中ロボットを自ら開発し、水中考古学や他の研究に利用しています(図21)。また、実際に自分が潜水するより手軽に、ゲーム感覚で水中遺跡を体感することができるため、遺跡活用の一つの手段として、注目されています(図22)。

塩釉瓶えんゆうびん「作品番号73」

出土地不明 明治時代 二十世紀 沖縄・多良間村教育委員会

ファン・ポッセ号が沈んだとされる高田海岸で発見された伝わっています。しかし、オランダ人研究者によると、ファン・ポッセ号の遺品である可能性は低いと見られています。





column

保存処理

長い間水中に浸かっていた出土品をそのまま引き揚げて空気にさらすと、すぐに劣化が始まります。木材などの有機物は、陸の遺跡に比べて保存状態は良いのですが、あくまでも保存処理を行うことが前提です。せっかく苦労して引き揚げたものが、原形がわからないほど崩れてしまうこともあります。脱塩処理から始まり、特殊な薬品を木材に含浸させたり、鉄製品ではアルカリ性溶液を使い電解還元を行うなど、出土品それぞれに適した処理が必要となります。保存処理なくして水中遺跡の発掘作業はありえません。九州国立博物館では、X線CTスキャナーなどを利用して、出土品の状態を細部にまで調査して、適切な保存処理のために役立てています。

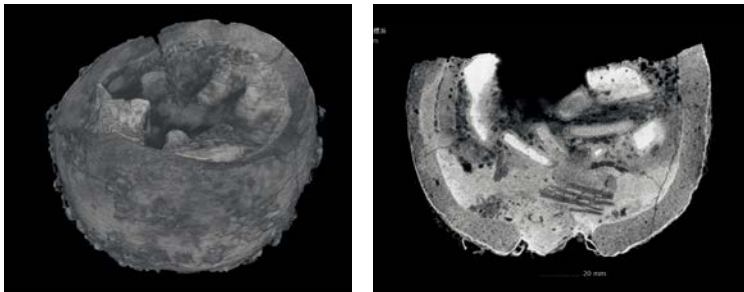
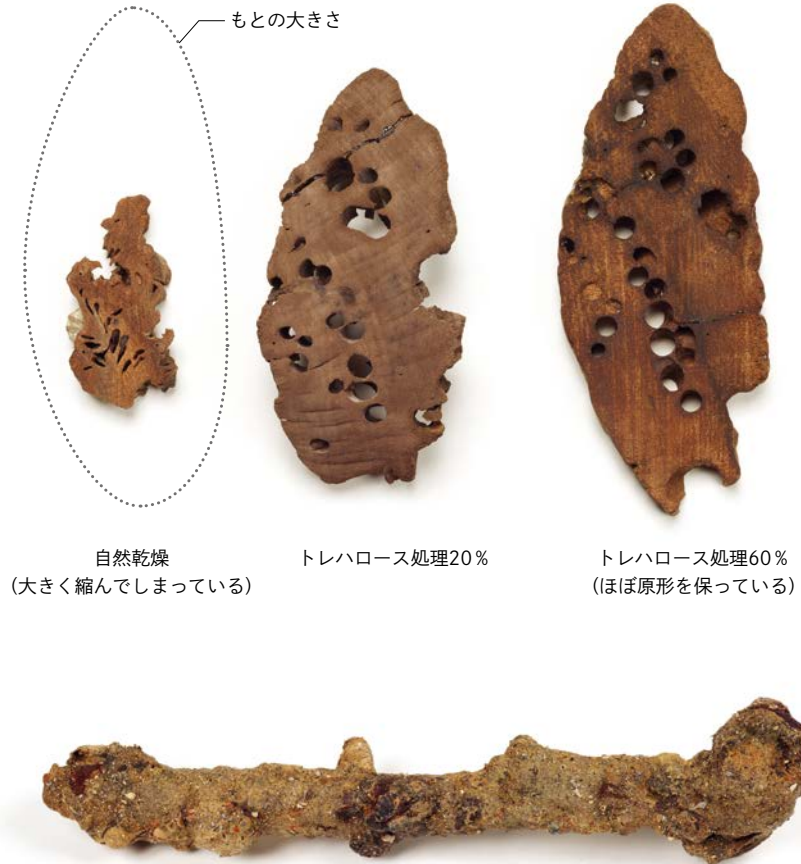


図24 「てつほう」のX線CT画像
CT画像から「てつほう」の中に鉄片や陶磁器などが詰め込まれていたことがわかります。

木材標本「作品番号78、80」

長崎・鷹島海底遺跡 鎌倉時代 十三世紀 長崎・松浦市教育委員会

新しい保存処理手法を開発するためには、さまざまな実験が必要になります。この実験では、鷹島海底遺跡から出土した木材の中からフナクイムシによる被害（表面の丸い穴）が多かったものを選んで標本として使用しています。一つの木材を輪切りにして、それぞれ別の方法で処理を行ったもので、処理の方法によって形が大きく変わってしまっています。保存処理がいかに重要か、これらのサンプルが示しています。



自然乾燥
(大きく縮んでしまっている)

トレハロース処理20%

トレハロース処理60%
(ほぼ原形を保っている)

鉄銚「作品番号82」

長崎・鷹島海底遺跡
鎌倉時代 十三世紀
長崎・松浦市教育委員会

鉄製品は原形がわからないほど錆でふくることがあります。X線CTスキャナーを利用して銚の中身を確認すると、鉄銚であることがわかります(図23)。ただし、中は空洞で表面にわずかに鉄が残っているのみでした。白い部分は密度が高く金属が残っていること、暗い部分は密度が低く空洞になっていることを示しています。



図23 鉄銚のX線CT画像

水中遺跡を再現する

水中の作業は時間との戦いです。一日の潜水時間は決まっているため、いかに効率よく発掘と記録作業を進めるかが、水中考古学者の課題です。デジタル技術の進歩は、水中での記録作業を簡略化し、また、「見えない遺跡を見せる」ための課題も同時に解決できる可能性を秘めています。例えば、遺跡のデジタルデータ（写真）から三次元情報を読み取り、パソコンの画面上で遺跡を再現する技術が開発されています。この技術は、写真実測、もしくはフォトグラメトリーと呼ばれています。

遺跡を三次元で再現するには、膨大な量のデータが必要です。遺跡を細部に至るまでさまざまな角度から写真（もしくはビデオ）撮影する必要があります。一隻の沈没船で数千から一万枚を超える写真が必要となります。水中で数千枚の写真を撮るのは大変です。また、得られた生のデータを、考古学研究に使えるデータに変換する作



図25 鷹島2号船 船首部分

業は、経験となによりも根気が必要です。この技術は、世界の水中考古学者の間で急速に広まりつつあり、日本の水中遺跡でも利用されています。松浦市の鷹島海底遺跡で発見された鷹島2号船は、まさにこの技術でデジタル化され、再現されています。得られたデータは遺跡の様子を広く一般に知ってもらうために活用されています。松浦市が作成したVR（バーチャル・リアリティ）映像は、子どもにも見てわかるツールとして好評です。

九州国立博物館では、鷹島2号船の船首部を実物大で復元しています。あたかも水中にいるような体験ができますが、一朝一夕にでき上がったものではありません。松浦市教育委員会と琉球大学の研究、そして遺跡を撮影した潜水士やデータ作成者などさまざまな人の努力が繋がった結果です。



図26 鷹島2号船 現状復元3D画像





主要参考文献（筆者五十音順）

【書籍・研究論文】

- ▽アジア水中考古学研究所『水中考古学研究』一〇五号、二〇〇五〜二〇一一年
- ▽アジア水中考古学研究所『水中文化遺産データベース作成と水中考古学の推進 海の文化遺産総合調査報告書・全国水中遺跡地図』、二〇一三年
- ▽荒木伸介『水中考古学』、ニュー・サイエンス社、一九八五年
- ▽井上たかひこ『水中考古学 クレオパトラ宮殿から元寇船、タイタニックまで』、中央公論新社、二〇一五年
- ▽井伏鱒二『海揚がり』、新潮社、一九八一年
- ▽今津節生・中田敦之・高妻洋成・伊藤幸司・藤田浩明・小林啓『鷹島沖海底遺跡出土木製品へのトレハロース含浸法の適応―基礎的な実験結果について―』、『日本文化財科学会第29回大会発表要旨集』、日本文化財科学会、二〇一二年
- ▽岩淵聡文『文化遺産の眠る海 水中考古学入門』、化学同人、二〇一二年
- ▽小江慶雄『水中考古学入門』NHKブックス四二二、日本放送出版協会、一九八二年
- ▽大濱永巨『名蔵シタダル遺跡について』、『南東考古』一四、沖縄考古学会、一九九四年
- ▽片桐千亜紀・宮城弘樹・渡辺美季『沖縄の水中文化遺産 青い海に沈んだ歴史のカケラ』、南西諸島水中文化遺産研究会、二〇一四年
- ▽金田明美『多良間島沖で難破したオランダ商船ファン・ボッセ号の歴史的考証』、『日蘭学会会誌』二六巻一号、日蘭学会、二〇〇一年
- ▽北塩原村史編さん委員会『北塩原村史 資料編』、二〇〇七年
- ▽（財）滋賀県文化財保護協会『びわこ水中考古学の世界』、サンライズ出版、二〇一〇年
- ▽坂上憲光・小野林太郎・李銀姫・片桐千亜紀・山本祐司・中西裕見子『石垣島における水中ロボットを利用した水中文化遺産教育』、『工学教育』六四巻一号、日本工学教育協会、二〇一六年
- ▽塩屋勝利『玄界島の海底陶磁』、『福岡市立歴史資料館研究報告第12集』、福岡市立歴史資料館、一九八三年
- ▽坪井正五郎『石器時代杭上住居の跡は我国に存在せざるか』、『東京人類学会雑誌』二四巻二七八号、東京人類学会、一九〇九年
- ▽坪井正五郎『日本に於いて初めて発見されたる湖底の石器時代遺跡』、『東洋学芸雑誌』二六巻三三七号、東洋学芸社、一九〇九年
- ▽野上建紀、ダニエレ・ペトレッラ『バイア海底遺跡見学記』、『金大考古』五九号、金沢大学考古学研究室、二〇〇七年
- ▽橋本福松『諏訪湖底より石器を発見す』、『東京人類学会雑誌』二四巻二七八号、東京人類学会、一九〇九年
- ▽林博通・釜井俊孝・原口強『地震で沈んだ湖底の村 琵琶湖湖底遺跡を科学する』、サンライズ出版、二〇一二年
- ▽林田憲三（編）『水中文化遺産 海から蘇る歴史』、勉誠出版、二〇一七年
- ▽藤森栄一『諏訪湖底曾根の調査』、『信濃』十二巻七号、信濃史学会、一九六〇年
- ▽三上徹也『諏訪湖底の狩人たち 曾根遺跡』シリーズ『遺跡を学ぶ』一一〇、新泉社、二〇一六年
- ▽森浩一『紀淡海峡友ヶ島北方の海底遺物』、『古代学研究』三五号、古代学研究会、一九六三年
- ▽『季刊考古学』一二三三号、雄山閣、二〇一三年
- ▽『月刊考古学ジャーナル』四八〇、ニュー・サイエンス社、二〇〇一年
- ▽『月刊考古学ジャーナル』六四一、ニュー・サイエンス社、二〇一三年
- ▽文化庁『月刊文化財』六三四号、第一法規、二〇一六年
- ▽Bass, George. (ed.), *Beneath the Seven Seas*, Thames & Hudson, 2005
- ▽Catsambis, Alexis. "Before Antikythera: the First Underwater Archaeological Survey in Greece," *The International Journal of Nautical Archaeology* 35.1:104-7. 2006
- ▽Catsambis, Alexis. et al. (ed.), *The Oxford Handbook of Maritime Archaeology (Oxford Handbooks)*, Oxford University Press, 2011
- ▽Delgado, James. (ed.), *Encyclopedia of Underwater and Maritime Archaeology*, Yale University Press, 1997
- ▽Green, Jeremy. *Maritime Archaeology, Second Edition: A Technical Handbook*, Routledge, 2004
- ▽Kimura, Jun. *Archaeology of East Asian Shipbuilding*, University Press of Florida, 2016
- ▽Muckelroy, Keith. *Maritime Archaeology*, Cambridge University Press, 1979
- ▽National Maritime Institute of Maritime Cultural Heritage, *Underwater Archaeology in Korea*, Gongnyoung, 2016
- ▽National Maritime Museum of Sweden, *Vasa I: The Archeology of a Swedish Royal Ship of 1628*, Statens Maritima Museer, 2006
- ▽Nautical Archaeology Society, *Underwater Archaeology: The NAS Guide to Principles and Practice*, Wiley-Blackwell, 2008
- ▽Sasaki, Randall. *The Origins of the Lost Fleet of the Mongol Empire*, Texas A&M University Press, 2015
- ▽Steffy, Richard. *Wooden Ship Building and the Interpretation of Shipwrecks*, Texas A&M University Press, 1994
- ▽国家文物局水下文化遺產保护中心『水下考古学研究』一一一、二〇一二年、二〇一六年

▽国立海洋遺物展示館(国立海洋文化財研究所)『新安船Ⅰ、Ⅱ』、二〇〇六年

▽席龍飛『中国造船史』湖北教育出版社、二〇〇〇年

【図録】

▽アジア水中考古学研究所『海のタイムカプセル 水中考古学からのおくりもの』、二〇一二年

▽有田町歴史民俗資料館『海揚がりの肥前陶磁 海に残された有田焼』、二〇一〇年

▽江差町教育委員会『よみがえる幕末の軍艦―開陽丸 海底に探る日本史』、一九七一年

▽沖縄県立博物館・美術館『水中文化遺産―海に沈んだ歴史のカケラ』、二〇一六年

▽湖北町教育委員会『琵琶湖の神秘―葛籠尾崎湖底遺跡―』、二〇〇九年

▽滋賀県立近江風土記の丘資料館『謎の湖底遺跡を探る―琵琶湖1万年の変貌―』、一九八八年

▽滋賀県立安土城考古博物館・滋賀県文化財保護協会『水中考古学の世界 びわこ湖底の遺跡を掘る』、二〇〇九年

▽諏訪市博物館『諏訪市博物館研究紀要3 諏訪湖底曾根遺跡発見100周年記念 諏訪湖底にねむる謎の遺跡・曾根―2008年企画展・講演会記録集―』、二〇〇九年

▽福山市車の浦歴史民俗資料館『坂本龍馬というは丸事件』『船を沈めたその償いは金を取らずに国をとる』、二〇〇八年

【報告書】

▽九州・沖縄水中考古学協会、小値賀町教育委員会『山見沖海底遺跡』小値賀町文化財調査報告書第一六集、二〇〇二年

▽滋賀県教育委員会『琵琶湖の湖底遺跡 調査成果総括編』琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書一五―二、二〇一四年

▽滋賀県教育委員会『琵琶湖の湖底遺跡 調査成果概要・基礎データ編』琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書一五―三、二〇一五年

▽滋賀県立大学琵琶湖水中考古学研究会『西浜千軒遺跡 琵琶湖湖底遺跡の調査・研究』、二〇一六年

▽水中遺跡調査検討委員会・文化庁『日本における水中遺跡保護の在り方について(中間まとめ)』、二〇一六年

▽水中考古学研究所『広島県宇治島沖沈船(推定いろは丸)調査報告』水中考古学研究一、一九八九年

▽水中考古学研究所(財)京都市埋蔵文化財研究所『沈没船(19世紀のイギリス船)埋没地点遺跡発掘調査報告書―推定いろは丸―』、二〇〇六年

▽多良間村教育委員会『高田海岸遺跡』多良間村文化財調査報告書第一三集、二〇一七年

▽千葉大学文学部考古学研究室『千葉県館山市沖ノ島遺跡第1次発掘調査概報』、二〇〇四年

▽千葉大学文学部考古学研究室『千葉県館山市沖ノ島遺跡第2・3次発掘調査概報』、二〇〇六年

▽福岡市教育委員会『志賀島・玄界島』福岡市埋蔵文化財報告書第三九一集、一九九五年

▽文化庁『遺跡保存方法の検討―水中遺跡―』、二〇〇〇年

▽松浦市教育委員会『松浦市鷹島海底遺跡 総集編』松浦市文化財調査報告書第六集、二〇一二年

▽松浦市教育委員会『国指定史跡鷹島神崎遺跡保存管理計画書』、二〇一四年

▽水ノ子岩学術調査団『海底の古備前 水ノ子岩学術調査報告』、一九七八年

▽和歌山市教育委員会『和歌山市加太友ヶ島沖出土の陶磁器』、一九九七年

▽網走市郷土博物館『網走湖底遺跡』網走市郷土博物館報告二、一九六七年

▽池田栄史『水中考古学手法による元寇沈船の調査と研究』平成二三年度〜平成二七年度科学研究費補助金 基盤研究(S)(課題番号23222002)研究成果報告書第三冊(最終報告書)、琉球大学法文学部考古学研究室、二〇一六年

▽宇検村教育委員会『倉木崎海底遺跡発掘調査概報』宇検村文化財調査報告書第一集、一九九八年

▽宇検村教育委員会『倉木崎海底遺跡発掘調査報告書』宇検村文化財調査報告書第二集、一九九九年

▽江差町教育委員会『開陽丸 第1〜6次調査報告』、一九七五〜一九八〇年

▽江差町教育委員会『開陽丸 B地区第1〜7次調査報告書』、一九八三〜一九八九年

▽沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県の水中遺跡・沿岸遺跡 沿岸地域遺跡分布調査報告』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第八七集、二〇一七年

▽小値賀町教育委員会『小値賀島周辺海域及び前方湾海底遺跡調査報告書』小値賀町文化財調査報告書第二〇集、二〇〇七年

▽小値賀町教育委員会『小値賀町文化財調査報告書第一八集、二〇〇七年

▽小値賀町教育委員会『小値賀島前方湾海底遺跡調査報告書』小値賀町文化財調査報告書第二〇集、二〇〇七年

▽小値賀町教育委員会『小値賀島前方湾海底遺跡調査報告書』小値賀町文化財調査報告書第二二集、二〇〇八年



出品目録

※指定欄の◎は重要文化財、○は県指定文化財

No. 指定	作品名称	員数	出土遺跡／作者等	時代	世紀	所蔵
1	◎ 蒙古襲来絵詞 模本	二卷	狩野晴川院養信筆	江戸時代 原品・鎌倉時代	十九世紀 原品・十三世紀	東京国立博物館 原品・宮内庁三の丸尚蔵館
2	◎ 勘仲記(兼仲卿記)	三卷	広橋兼仲筆	鎌倉時代	十三世紀	千葉・国立歴史民俗博物館
3	○ 管軍総把印	一点	長崎・鷹島海底遺跡	鎌倉時代	十三世紀	長崎・松浦市教育委員会
4	胄	一点	長崎・鷹島海底遺跡	鎌倉時代	十三世紀	長崎・松浦市教育委員会
5	てつほう(球状土製品)	二点	長崎・鷹島海底遺跡	鎌倉時代	十三世紀	長崎・松浦市教育委員会
6	石彈	二点	長崎・鷹島海底遺跡	鎌倉時代	十三世紀	長崎・松浦市教育委員会
7	漆塗弩	一点	長崎・鷹島海底遺跡	鎌倉時代	十三世紀	長崎・松浦市教育委員会
8	漆塗弓	一点	長崎・鷹島海底遺跡	鎌倉時代	十三世紀	長崎・松浦市教育委員会
9	胡篋金具	九点	長崎・鷹島海底遺跡	鎌倉時代	十三世紀	長崎・松浦市教育委員会
10	矢束	一点	長崎・鷹島海底遺跡	鎌倉時代	十三世紀	長崎・松浦市教育委員会
11	漆塗靴	一点	長崎・鷹島海底遺跡	鎌倉時代	十三世紀	長崎・松浦市教育委員会
12	銅銭 崇寧重宝	一点	長崎・鷹島海底遺跡	鎌倉時代	十三世紀	長崎・松浦市教育委員会
13	銅銭 福祿壽昌	二点	長崎・鷹島海底遺跡	鎌倉時代	十三世紀	長崎・松浦市教育委員会
14	銅銭 太平通宝	八十八点	長崎・鷹島海底遺跡	鎌倉時代	十三世紀	長崎・松浦市教育委員会
15	褐釉壺	二点	長崎・鷹島海底遺跡	鎌倉時代	十三世紀	長崎・松浦市教育委員会
16	青磁碗	一点	長崎・鷹島海底遺跡	鎌倉時代	十三世紀	長崎・松浦市教育委員会
17	高麗青磁壺	一点	長崎・鷹島海底遺跡	鎌倉時代	十三世紀	長崎・松浦市教育委員会
18	木像	一点	長崎・鷹島海底遺跡	鎌倉時代	十三世紀	長崎・松浦市教育委員会
19	匙	一点	長崎・鷹島海底遺跡	鎌倉時代	十三世紀	長崎・松浦市教育委員会
20	漆塗椀	一点	長崎・鷹島海底遺跡	鎌倉時代	十三世紀	長崎・松浦市教育委員会
21	漆塗鉢	一点	長崎・鷹島海底遺跡	鎌倉時代	十三世紀	長崎・松浦市教育委員会
22	木製櫛	一点	長崎・鷹島海底遺跡	鎌倉時代	十三世紀	長崎・松浦市教育委員会
23	白玉製獅子像	一点	長崎・鷹島海底遺跡	鎌倉時代	十三世紀	長崎・松浦市教育委員会
24	モンゴル軍船の椀	一点	長崎・鷹島海底遺跡	鎌倉時代	十三世紀	長崎・松浦市教育委員会
25	内容物が残っているてつほう(球状土製品)	一点	長崎・鷹島海底遺跡	鎌倉時代	十三世紀	長崎・松浦市教育委員会
26	水中ロボット ケイちゃん	一点		現代		静岡・東海大学海洋学部

No. 指定 作品名称

頁数

出土遺跡／作者等

時代

世紀

所蔵

第1章 水中に遺跡あり——水中考古学のあけぼの——

27	青磁碗	一点	和歌山・ 沖ノ島北方海底遺跡	室町時代	十五世紀	和歌山・淡島神社
28	染付碗	一点	和歌山・ 沖ノ島北方海底遺跡	江戸時代	十八世紀	和歌山・淡島神社
29	石鏃	二点	長野・曾根遺跡	縄文時代	一万三千～ 一万年前	東京大学総合研究博物館
30	ラベル（複製）	一点		原品・明治時代	原品・二十世紀	東京大学総合研究博物館
31	深鉢	一点	滋賀・葛籠尾崎湖底遺跡	縄文時代	五千～四千年前	滋賀・葛籠尾崎湖底遺跡資料館
32	小江慶雄自筆ノート	一冊		昭和時代	二十世紀	滋賀・葛籠尾崎湖底遺跡資料館

第2章 水中発掘調査のはじまり——水中での学術調査の歴史——

33	鮫皮台	二点	広島・沈没船（十九世紀のイギリス船）埋没地点遺跡	江戸時代	十九世紀	広島・福山市立鞆の浦歴史民俗資料館
34	ネジ	四本	広島・沈没船（十九世紀のイギリス船）埋没地点遺跡	江戸時代	十九世紀	広島・福山市立鞆の浦歴史民俗資料館
35	ネジ付木片	一点	広島・沈没船（十九世紀のイギリス船）埋没地点遺跡	江戸時代	十九世紀	広島・福山市立鞆の浦歴史民俗資料館
36	木製滑車	一点	広島・沈没船（十九世紀のイギリス船）埋没地点遺跡	江戸時代	十九世紀	広島・福山市立鞆の浦歴史民俗資料館
37	甲板明り取りガラス	一点	広島・沈没船（十九世紀のイギリス船）埋没地点遺跡	江戸時代	十九世紀	広島・いろは丸展示館
38	石炭	一点	広島・沈没船（十九世紀のイギリス船）埋没地点遺跡	江戸時代	十九世紀	広島・いろは丸展示館
39	施条榴弾	一点	北海道・開陽丸遺跡	江戸時代	十九世紀	北海道・江差町教育委員会
40	滑空榴弾	一点	北海道・開陽丸遺跡	江戸時代	十九世紀	北海道・江差町教育委員会
41	拳銃	一点	北海道・開陽丸遺跡	江戸時代	十九世紀	北海道・江差町教育委員会
42	象限儀	一点	北海道・開陽丸遺跡	江戸時代	十九世紀	北海道・江差町教育委員会
43	ペーパーウエイト	一点	和歌山・紀伊大島樫野崎沖	明治時代	十九世紀	和歌山・串本町
44	横浜焼カップ	一点	和歌山・紀伊大島樫野崎沖	明治時代	十九世紀	和歌山・串本町
45	横浜焼ソーサー	一点	和歌山・紀伊大島樫野崎沖	明治時代	十九世紀	和歌山・串本町
46	海軍将校制服のボタン	一点	和歌山・紀伊大島樫野崎沖	明治時代	十九世紀	和歌山・串本町
47	銃弾	一点	和歌山・紀伊大島樫野崎沖	明治時代	十九世紀	和歌山・串本町
48	船体の被覆銅板	一点	和歌山・紀伊大島樫野崎沖	明治時代	十九世紀	和歌山・串本町
49	耐火煉瓦	一点	和歌山・紀伊大島樫野崎沖	明治時代	十九世紀	和歌山・串本町
50	釘	四本	和歌山・紀伊大島樫野崎沖	明治時代	十九世紀	和歌山・串本町
51	ネジ	一本	和歌山・紀伊大島樫野崎沖	明治時代	十九世紀	和歌山・串本町
52	一石五輪塔	一点	滋賀・西浜千軒遺跡	室町時代	十五世紀	滋賀県立大学
53	海中から引き揚げられた書籍（一部）	一点	北海道・開陽丸遺跡	江戸時代	十九世紀	北海道・江差町教育委員会
54	炭化米	一点	長崎・鷹島海底遺跡	鎌倉時代	十三世紀	長崎・松浦市教育委員会





No.	指定 作品名称	員数	出土遺跡／作者等	時代	世紀	所蔵
84	丸瓦	一点	福岡・伝相島沖	平安時代	九世紀	福岡大学考古学研究室
83	平瓦	一点	福岡・伝相島沖	平安時代	九世紀	福岡大学考古学研究室
82	鉄銚	一点	長崎・鷹島海底遺跡	鎌倉時代	十三世紀	長崎・松浦市教育委員会
81	ポリエチレングリコール処理木材標本	二点	長崎・鷹島海底遺跡	鎌倉時代	十三世紀	長崎・松浦市教育委員会
80	トレハロース処理(六〇%)木材標本	一点	長崎・鷹島海底遺跡	鎌倉時代	十三世紀	長崎・松浦市教育委員会
79	トレハロース処理(二〇%)木材標本	一点	長崎・鷹島海底遺跡	鎌倉時代	十三世紀	長崎・松浦市教育委員会
78	自然乾燥木材標本	一点	長崎・鷹島海底遺跡	鎌倉時代	十三世紀	長崎・松浦市教育委員会
77	硯	一点	沖縄・高田海岸表採	江戸時代	十九世紀	沖縄・多良間村教育委員会
76	褐釉壺	一点	沖縄・高田海岸表採	江戸時代	十九世紀	沖縄・多良間村教育委員会
75	壺蓋	一点	沖縄・高田海岸表採	江戸時代	十九世紀	沖縄・多良間村教育委員会
74	青花碗	二点	沖縄・高田海岸表採	江戸時代	十九世紀	沖縄・多良間村教育委員会
73	塩釉瓶	一点	出土地不明	明治時代	二十世紀	沖縄・多良間村教育委員会
72	天目	一点	長崎・前方湾海底遺跡	鎌倉時代	十三世紀	長崎・小値賀町教育委員会
71	白磁碗	一点	長崎・前方湾海底遺跡	平安・鎌倉時代	十二世紀	長崎・小値賀町教育委員会
70	褐釉壺	一点	長崎・前方湾海底遺跡	鎌倉時代	十三世紀	長崎・小値賀町教育委員会
69	青磁皿	一点	長崎・前方湾海底遺跡	平安・鎌倉時代	十二世紀	長崎・小値賀町教育委員会
68	青磁碗	一点	長崎・前方湾海底遺跡	平安・鎌倉時代	十二世紀	長崎・小値賀町教育委員会
67	青花瓶	一点	長崎・山見沖海底遺跡	室町時代	十六世紀	長崎・小値賀町教育委員会
66	ハンネラ土器蓋	一点	長崎・山見沖海底遺跡	室町時代	十六世紀	長崎・小値賀町教育委員会
65	ハンネラ土器壺	一点	長崎・山見沖海底遺跡	室町時代	十六世紀	長崎・小値賀町教育委員会
64	褐釉壺	一点	長崎・山見沖海底遺跡	室町時代	十六世紀	長崎・小値賀町教育委員会
63	インゴット	一点	長崎・山見沖海底遺跡	室町時代	十六世紀	長崎・小値賀町教育委員会
62	褐釉壺	二点	鹿児島・倉木崎海底遺跡	平安・鎌倉時代	十二世紀	鹿児島・宇検村教育委員会
61	青白磁瓶蓋	一点	鹿児島・倉木崎海底遺跡	平安・鎌倉時代	十二世紀	鹿児島・宇検村教育委員会
60	青白磁碗	一点	鹿児島・倉木崎海底遺跡	平安・鎌倉時代	十二世紀	鹿児島・宇検村教育委員会
59	白磁壺	二点	鹿児島・倉木崎海底遺跡	平安・鎌倉時代	十二世紀	鹿児島・宇検村教育委員会
58	白磁皿	二点	鹿児島・倉木崎海底遺跡	平安・鎌倉時代	十二世紀	鹿児島・宇検村教育委員会
57	白磁碗	一点	鹿児島・倉木崎海底遺跡	平安・鎌倉時代	十二世紀	鹿児島・宇検村教育委員会
56	青磁皿	二点	鹿児島・倉木崎海底遺跡	平安・鎌倉時代	十二世紀	鹿児島・宇検村教育委員会
55	青磁碗	十三点	鹿児島・倉木崎海底遺跡	平安・鎌倉時代	十二世紀	鹿児島・宇検村教育委員会

第3章 最新の水中考古学調査 —これからの水中考古学—

画像提供者

- [作品番号 1・3・5・10・15・20・31・36・41・43・45・52・54・78・80・82・83・84]
落合晴彦（九州国立博物館）撮影
- [作品番号 2] 国立歴史民俗博物館 [作品番号 12・14・22] 松浦市教育委員会（牛嶋茂撮影）
[作品番号 27・28] 和歌山市教育委員会 [作品番号 55・62・63・67・68・72] 佐々木蘭貞撮影
[作品番号 73] 多良間村教育委員会（吉田東明撮影）
- [図 1・17] 佐々木蘭貞撮影 [図 2] Oada/Seguin/DRASSM
- [図 3] 諏訪市博物館（原資料所蔵：藤森一彦） [図 4・7・15・21] 山本祐司撮影
- [図 6] 落合晴彦（九州国立博物館）撮影 [図 8] 三上徹也 [図 9] 諏訪市博物館
- [図 10] 江差町教育委員会 [図 11] 公益財団法人鍋島報效会所蔵／佐賀県立図書館寄託
- [図 12] NPO 法人水中考古学研究所 [図 13・14] 串本町
- [図 16] 九州国立博物館（イアン・マッカーン撮影） [図 18・20・23・24] 九州国立博物館
- [図 19] 多良間村教育委員会（片桐千亜紀撮影） [図 22] 東海大学海洋学部 [図 25] 池田栄史
- [図 26] 琉球大学、松浦市教育委員会（撮影・編集 町村剛）

謝辞

本展開催ならびに本図録作成にあたり、多くの方々と関係諸機関のご指導、ご協力を賜りました。
ここに記して深く感謝の意を表わします（五十音順、敬称略）

淡島神社、一般財団法人開陽丸青少年センター、いろは丸展示館、岩手県立美術館、宇検村教育委員会、江差町教育委員会、エルトゥールル号リサーチセンター、小値賀町教育委員会、串本町、公益財団法人鍋島報效会、国立歴史民俗博物館、滋賀県立大学、新宮町教育委員会、諏訪市博物館、仙台市博物館、多良間村教育委員会、葛籠尾崎湖底遺跡資料館、東海大学、東京国立博物館、東京大学総合研究博物館、福岡大学、福山市轄の浦歴史民俗資料館、松浦市教育委員会、松浦市立埋蔵文化財センター、和歌山市教育委員会、和歌山市立博物館、NPO 法人アジア水中考古学研究所、NPO 法人水中考古学研究所

合澤哲郎、赤司善彦、赤松宏記、荒木和憲、荒堀弘樹、池田栄史、池田三紗、稲葉佳代子、今津節生、内野義、太田宏一、岡本美幸、片桐千亜紀、木村淳、小久保和俊、坂上憲光、清水梨代、杉本憲一、園尾裕、高橋勝則、高橋秀幸、中井均、中川永、中島透、中田敦之、平田賢明、藤森一彦、前田光穂、町村剛、三上徹也、宮原浩、桃崎祐輔、桃原薫、矢野健一、山船晃太郎、山本祐司、吉崎伸、吉田東明、涌井要助、梓谷かおり、渡聡子、イアン・マッカーン、トゥファン・トゥランル、ベルタ・リエゾ



Part 3:
**The Latest in Underwater
Archaeological Survey
Technology**

—The future of underwater
archaeology

55
Celadon Bowl

From Kurakizaki Underwater site,
Kagoshima
Heian period to Kamakura period,
12th century
Uken Village Board of Education,
Kagoshima

56
Celadon Plate

From Kurakizaki Underwater site,
Kagoshima
Heian period to Kamakura period,
12th century
Uken Village Board of Education,
Kagoshima

57
White Porcelain Bowl

From Kurakizaki Underwater site,
Kagoshima
Heian period to Kamakura period,
12th century
Uken Village Board of Education,
Kagoshima

58
White Porcelain Plate

From Kurakizaki Underwater site,
Kagoshima
Heian period to Kamakura period,
12th century
Uken Village Board of Education,
Kagoshima

59
White Porcelain Jar

From Kurakizaki Underwater site,
Kagoshima
Heian period to Kamakura period,
12th century
Uken Village Board of Education,
Kagoshima

60
Pale Celadon Bowl

From Kurakizaki Underwater site,
Kagoshima
Heian period to Kamakura period,
12th century
Uken Village Board of Education,
Kagoshima

61
Pale Celadon Bottle Lid

From Kurakizaki Underwater site,
Kagoshima
Heian period to Kamakura period,
12th century
Uken Village Board of Education,
Kagoshima

62
Storage Jar with Brown Glaze

From Kurakizaki Underwater site,
Kagoshima
Heian period to Kamakura period,
12th century
Uken Village Board of Education,
Kagoshima

63
Ingot (Lead)

From Yamami Underwater site,
Nagasaki
Muromachi period, 16th century
Ojika Town Board of Education,
Nagasaki

64
Storage Jar with Brown Glaze

From Yamami Underwater site,
Nagasaki
Muromachi period, 16th century
Ojika Town Board of Education,
Nagasaki

65
**Ayutthaya (Thai) Earthenware
Jar**

From Yamami Underwater site,
Nagasaki
Muromachi period, 16th century
Ojika Town Board of Education,
Nagasaki

66
**Ayutthaya (Thai) Earthenware
Jar Lid**

From Yamami Underwater site,
Nagasaki
Muromachi period, 16th century
Ojika Town Board of Education,
Nagasaki

67
**Vase with Underglaze Cobalt
Design**

From Yamami Underwater site,
Nagasaki
Muromachi period, 16th century
Ojika Town Board of Education,
Nagasaki

68
Celadon Bowl

From Maegata Bay Underwater site,
Nagasaki
Heian period to Kamakura period,
12th century
Ojika Town Board of Education,
Nagasaki

69
Celadon Plate

From Maegata Bay Underwater site,
Nagasaki
Heian period to Kamakura period,
12th century
Ojika Town Board of Education,
Nagasaki

70
Storage Jar with Brown Glaze

From Maegata Bay Underwater site,
Nagasaki
Kamakura period, 13th century
Ojika Town Board of Education,
Nagasaki

71
White Porcelain Bowl

From Maegata Bay Underwater site,
Nagasaki
Heian period to Kamakura period,
12th century
Ojika Town Board of Education,
Nagasaki

72
Bowl of Tenmoku Type

From Maegata Bay Underwater site,
Nagasaki
Kamakura period, 13th century
Ojika Town Board of Education,
Nagasaki

73
Vase with Salt Glaze

Origin unknown
Meiji period, 20th century
Tarama Village Board of Education,
Okinawa

74
**Bowl with Underglaze Cobalt
Design**

Collected from Takada Beach,
Okinawa
Edo period, 19th century
Tarama Village Board of Education,
Okinawa

75
Jar Lid

Collected from Takada Beach,
Okinawa
Edo period, 19th century
Tarama Village Board of Education,
Okinawa

76
Storage Jar with Brown Glaze

Collected from Takada Beach,
Okinawa
Edo period, 19th century
Tarama Village Board of Education,
Okinawa

77
Inkstone

Collected from Takada Beach,
Okinawa
Edo period, 19th century
Tarama Village Board of Education,
Okinawa

78
Wood Specimen, Naturally Dried

From Takashima Underwater site,
Nagasaki
Kamakura period, 13th century

Matsuura City Board of Education,
Nagasaki

79
**Wood Specimen Treated with
Trehalose (20%)**

From Takashima Underwater site,
Nagasaki
Kamakura period, 13th century
Matsuura City Board of Education,
Nagasaki

80
**Wood Specimen Treated with
Trehalose (60%)**

From Takashima Underwater site,
Nagasaki
Kamakura period, 13th century
Matsuura City Board of Education,
Nagasaki

81
**Wood Specimen Treated with
Polyethylene Glycol**

From Takashima Underwater site,
Nagasaki
Kamakura period, 13th century
Matsuura City Board of Education,
Nagasaki

82
Iron Lance

From Takashima Underwater site,
Nagasaki
Kamakura period, 13th century
Matsuura City Board of Education,
Nagasaki

83
Flat roof tiles

Reportedly from Ainoshima Shore,
Fukuoka
Heian period, 9th century
Archeological Studies Laboratory
Fukuoka University

84
Round roof tiles

Reportedly from Ainoshima Shore,
Fukuoka
Heian period, 9th century
Archeological Studies Laboratory
Fukuoka University



24
Anchor of a Mongol invasion warship

From Takashima Underwater site, Nagasaki
Kamakura period, 13th century
Matsuura City Board of Education, Nagasaki

25
Tetsuhau (spherical clay ordnance) with contents

From Takashima Underwater site, Nagasaki
Kamakura period, 13th century
Matsuura City Board of Education, Nagasaki

26
Remotely Operated Vehicle "Kei-chan"

Modern
Tokai University School of Marine Science and Technology, Shizuoka

Part 1:
Sites exist underwater
—The Dawn of Underwater Archaeology

27
Celadon Bowl

From Okinoshima North side Underwater site, Wakayama
Muromachi period, 15th century
Awashima Shrine, Wakayama

28
Bowl with Underglaze Cobalt Design

From Okinoshima North side Underwater site, Wakayama
Edo period, 18th century
Awashima Shrine, Wakayama

29
Flint Arrowhead

From Sone site, Nagano

Jomon period, 13000-10000 years ago
The University Museum, The University of Tokyo

30
Label (reproduction)

(Original)Meiji period, 20th century
The University Museum, The University of Tokyo

31
Deep Bowl

From Tsuzura Ozaki Lake-Bottom site, Shiga
Jomon period, 5000-4000 years ago
Tsuzura Ozaki Lake-Bottom Site Museum, Shiga

32
Handwritten Notebook of Oe Yoshio

Showa period, 20th century
Tsuzura Ozaki Lake-Bottom Site Museum, Shiga

Part 2:
The Beginnings of Underwater Excavation
—Development of underwater archaeology as a scientific field

33
Sharkskin (Shagreen) Stand

From Shipwreck site of a 19th century English-vessel, Hiroshima
Edo period, 19th century
Fukuyama City Tomonoura Museum of History and Folklore, Hiroshima

34
Screw

From Shipwreck site of a 19th century English-vessel, Hiroshima
Edo period, 19th century
Fukuyama City Tomonoura Museum of History and Folklore, Hiroshima

35
Wood Block with Screws

From Shipwreck site of a 19th century English-vessel, Hiroshima
Edo period, 19th century
Fukuyama City Tomonoura Museum of History and Folklore, Hiroshima

36
Wood Pulley

From Shipwreck site of a 19th century English-vessel, Hiroshima
Edo period, 19th century
Fukuyama City Tomonoura Museum of History and Folklore, Hiroshima

37
Ship Deck Skylight Glass

From Shipwreck site of a 19th century English-vessel, Hiroshima
Edo period, 19th century
The Exhibition House of the Iroha Maru, Hiroshima

38
Coal

From Shipwreck site of a 19th century English-vessel, Hiroshima
Edo period, 19th century
The Exhibition House of the Iroha Maru, Hiroshima

39
Rifled Explosive Shot

From the *Kaiyo Maru* site, Hokkaido
Edo period, 19th century
Esashi Town Board of Education, Hokkaido

40
Smoothbore Explosive Shot

From the *Kaiyo Maru* site, Hokkaido
Edo period, 19th century
Esashi Town Board of Education, Hokkaido

41
Screw Handgun

From the *Kaiyo Maru* site, Hokkaido
Edo period, 19th century
Esashi Town Board of Education, Hokkaido

42
Navigational Quadrant

From the *Kaiyo Maru* site, Hokkaido
Edo period, 19th century
Esashi Town Board of Education, Hokkaido

43
Paperweight

From Kii Oshima Kashinozaki Shore, Wakayama
Meiji period, 19th century
Kushimoto Town, Wakayama

44
Cup, Yokohama ware

From Kii Oshima Kashinozaki Shore, Wakayama
Meiji period, 19th century
Kushimoto Town, Wakayama

45
Saucer, Yokohama ware

From Kii Oshima Kashinozaki Shore, Wakayama
Meiji period, 19th century
Kushimoto Town, Wakayama

46
Naval Officer's Uniform Button

From Kii Oshima Kashinozaki Shore, Wakayama
Meiji period, 19th century
Kushimoto Town, Wakayama

47
Bullet

From Kii Oshima Kashinozaki Shore, Wakayama
Meiji period, 19th century
Kushimoto Town, Wakayama

48
Copper Hull Sheathing

From Kii Oshima Kashinozaki Shore, Wakayama
Meiji period, 19th century
Kushimoto Town, Wakayama

49
Firebrick

From Kii Oshima Kashinozaki Shore, Wakayama

Meiji period, 19th century
Kushimoto Town, Wakayama

50
Nails

From Kii Oshima Kashinozaki Shore, Wakayama
Meiji period, 19th century
Kushimoto Town, Wakayama

51
Screw

From Kii Oshima Kashinozaki Shore, Wakayama
Meiji period, 19th century
Kushimoto Town, Wakayama

52
Single Stone Five-Storied Pagoda

From Nishihama Sengen site, Shiga
Muromachi period, 15th century
The University of Shiga Prefecture

53
A part of Manuscript raised from the sea

From the *Kaiyo Maru* site, Hokkaido
Edo period, 19th century
Esashi Town Board of Education, Hokkaido

54
Carbonized Rice

From Takashima Underwater site, Nagasaki
Kamakura period, 13th century
Matsuura City Board of Education, Nagasaki



Notes

- This Catalogue accompanies the feature exhibition "History Revealed from the Deep: The Frontiers of Underwater Archaeology," held in the Main Exhibition Hall of Kyushu National Museum from July 15 to September 10, 2017.
- Though the catalogue numbers are identical with the exhibit numbers in the galleries, the order of display may be different from the serial order in the catalogue. In addition, photographs of all works are not published in this catalogue.
- Essays and catalogue entries have been written by SASAKI Randy (curator, Kyushu National Museum).
- Photographs were taken by SASAKI Randy and OCHIAI Haruhiko (Kyushu National Museum). This catalogue also uses photographic documents provided by the owners and the parties concerned. All the providers of photographs are listed at the end of this catalogue.
- English translation is by Maiko Behr with editorial supervision by DAINOBU Yuji (Kyushu National Museum) and SASAKI Randy.
- This catalogue was edited by SASAKI Randy and IMAI Ryoko and OGAWA Kanae (Kyushu National Museum) and MITSUYOSHI Mieko and KATSUNO Tomoko (Kyushu National Museum).
- This Exhibition is supported by Museum of Maritime Science, "The Uminomanabi Museum Support."

List of Works

Notes

Catalogue entry number
Designation

Title

Archeological site or place of origin
Artist or writer
Period (date)
Name and location of the owner

Prologue:

Resurrecting the Mongol Invasions

1

Copy of a picture scroll of the Mongol invasions: 1274 and 1281

By Kano Seisen'in Osanobu
Edo period, 19th century
(Original) Kamakura period, 13th century

Tokyo National Museum
(Original) The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shozokan

2 Important cultural property

Kanchuki, a diary of a court noble in Kyoto

By Hirohashi Kanenaka
Kamakura period, 13th century
National Museum of Japanese History, Chiba

3 Prefectural cultural property

Mongol Officer's Seal

From Takashima Underwater site, Nagasaki
Kamakura period, 13th century
Matsuura City Board of Education, Nagasaki

4

Helmet

From Takashima Underwater site, Nagasaki
Kamakura period, 13th century
Matsuura City Board of Education, Nagasaki

5

Tetsuhau (spherical clay ordnance)

From Takashima Underwater site, Nagasaki
Kamakura period, 13th century
Matsuura City Board of Education, Nagasaki

6

Round Stone Shot

From Takashima Underwater site, Nagasaki
Kamakura period, 13th century
Matsuura City Board of Education, Nagasaki

7

Lacquered Crossbow

From Takashima Underwater site, Nagasaki
Kamakura period, 13th century
Matsuura City Board of Education, Nagasaki

8

Lacquered Bow

From Takashima Underwater site, Nagasaki
Kamakura period, 13th century
Matsuura City Board of Education, Nagasaki

9

Quiver Metal Fittings

From Takashima Underwater site, Nagasaki
Kamakura period, 13th century
Matsuura City Board of Education, Nagasaki

10

Bundle of Arrows

From Takashima Underwater site, Nagasaki
Kamakura period, 13th century
Matsuura City Board of Education, Nagasaki

11

Lacquered Scabbard

From Takashima Underwater site, Nagasaki

Kamakura period, 13th century
Matsuura City Board of Education, Nagasaki

12

Copper Coin with Chinese Characters Chong Ning Zhong Bao

From Takashima Underwater site, Nagasaki
Kamakura period, 13th century
Matsuura City Board of Education, Nagasaki

13

Copper Coin with Chinese Characters Fu Lu Shou Chang

From Takashima Underwater site, Nagasaki
Kamakura period, 13th century
Matsuura City Board of Education, Nagasaki

14

Copper Coin with Chinese Characters Tai Ping Tong Bao

From Takashima Underwater site, Nagasaki
Kamakura period, 13th century
Matsuura City Board of Education, Nagasaki

15

Storage Jar with Brown Glaze

From Takashima Underwater site, Nagasaki
Kamakura period, 13th century
Matsuura City Board of Education, Nagasaki

16

Celadon Bowl

From Takashima Underwater site, Nagasaki
Kamakura period, 13th century
Matsuura City Board of Education, Nagasaki

17

Korean Celadon Jar

From Takashima Underwater site, Nagasaki
Kamakura period, 13th century

Matsuura City Board of Education, Nagasaki

18

Wooden Statue

From Takashima Underwater site, Nagasaki
Kamakura period, 13th century
Matsuura City Board of Education, Nagasaki

19

Spoon

From Takashima Underwater site, Nagasaki
Kamakura period, 13th century
Matsuura City Board of Education, Nagasaki

20

Lacquered Cup

From Takashima Underwater site, Nagasaki
Kamakura period, 13th century
Matsuura City Board of Education, Nagasaki

21

Lacquered Bowl

From Takashima Underwater site, Nagasaki
Kamakura period, 13th century
Matsuura City Board of Education, Nagasaki

22

Comb

From Takashima Underwater site, Nagasaki
Kamakura period, 13th century
Matsuura City Board of Education, Nagasaki

23

White Jade Lion Figurine

From Takashima Underwater site, Nagasaki
Kamakura period, 13th century
Matsuura City Board of Education, Nagasaki



Foreword

In recent years, increasingly large number of underwater archaeological sites have been discovered around the world. These sites include locations that were originally on dry land but now submerged, as well as locations where a vessel sank. The most well-known underwater site in Japan is off Takashima Island in Nagasaki prefecture, where the remains of ships from the 13th-century Mongol invasion have been discovered. In many cases, artifacts uncovered from underwater archaeological sites are well preserved, almost as a “time capsule” that captures a particular historic moment essentially untouched. The cargo of these sunken ships serves as a valuable document of the nature of maritime trade at the time of sinking.

In 2013, the Agency for Cultural Affairs formed an advisory committee on the research and protection of underwater sites and has since carried out various studies on the subject of underwater archaeology. The Kyushu National Museum has been entrusted by the Agency to conduct research projects on the protection and utilization of underwater sites, including the study of how various foreign countries are managing underwater sites and the study of how to improve survey techniques for discovering new sites underwater.

The current feature exhibition, entitled “*History Revealed from the Deep: The Frontiers of Underwater Archaeology*”, looks back on the development of underwater archaeology in Japan through an examination of submerged sites and their artifacts, from the Palaeolithic to the Meiji period. The exhibition also presents the initiatives undertaken by this museum and the potential avenues for future research. We hope that these small treasures – awakened from their slumber at the bottom of the sea – will reveal insights into the history.

We are deeply grateful to the various individuals and institutions who have kindly lent their precious collections and offered their generous support on the occasion of this exhibition.



文化交流展 特別展示

「水の中からよみがえる歴史
——水中考古学最前線——」

編集・発行 九州国立博物館

デザイン 富 菊代（株式会社 西日本新聞印刷）
印刷・製本 株式会社 西日本新聞印刷

二〇一七年七月十五日発行

©二〇一七 九州国立博物館

本書の全部または一部を無断で転載、複製することを禁じます。